

湘南ペガサスのあゆみ

第2集 (平成5年～14年)



平成15年4月

湘南ペガサスサッカークラブ

目 次

巻頭言	柳川 明信	1
代表挨拶	井上 孝	2
お祝辞	桑田 孝	4
お祝辞	鈴木 中	5
追悼	松本 好且	7
追悼	佐野 碩	8
監督の回想		
1. 湘南ベガサス (クラブ内呼称「ジュニアチーム」)		
1. 1 監督の悩み	田部 井 徹	9
1. 2 ベガサス入会から10年をふりかえる	浅倉 泰	9
1. 3 ジュニア監督の思い出	関 佳 史	11
1. 4 ジュニアと呼ばれる四十雀	元 松 経 男	12
2. 湘南ベガサスシニア		
2. 1 平成5年度の活動報告	中 原 弘 巳	13
2. 2 現場呼出し役	篠 田 亮	14
2. 3 平成8年度の活動報告	山 本 修	15
2. 4 監督の記	植 田 興 義	16
2. 5 監督の記	山 本 豊	17
2. 6 サッカーに魅せられ40年	福 井 民 雄	17
2. 7 監督の記	阿 部 裕	18
2. 8 湘南ベガサスチームと出会って	北 原 章	18
2. 9 シニアチーム五十雀リーグ監督として	牧 村 英 樹	19
3. 湘南ベガサス60		
3. 1 平成12~13年度の活動報告	中 原 弘 巳	20
3. 2 平成14年度の活動報告	同 上	21
湘南ベガサスシニアチームの渉外担当として	山 本 修	22
シニアリーグとの関わり (審判活動を通して見たシニアサッカー)	渡 嶋 九 州 夫	26
随 想		
1. 雨の日の思い出	伊 通 元 康	28
2. 私とサッカーの出会い	伊 藤 貞 夫	28
3. サッカーつれづれ	黄 瀬 直 彦	29
4. 爺リーグ雑感	坂 部 治 郎	29
5. 25年目の思い	田 中 聡	30
6. 湘南サッカーと共に	遠 見 治	31
7. 15年間の思い出	藤 田 勉	32
8. フレッシュマンの今	水 上 雅 樹	32
あ と が き		33
資 料		
1. 年 譜		1
2. 役 員 推 移		2
3. ユニフォーム変遷		3
4. 湘南サッカーと鈴木先生		5
5. 戦 績		
5. 1 郡市四十雀リーグ		6
5. 2 郡市五十雀リーグ		15
5. 3 ベガサス60		18
6. 会 員 名 簿		
6. 1 湘南ベガサス (クラブ内呼称「ジュニア」)		21
6. 2 湘南ベガサスシニア		22
6. 3 湘南ベガサス 60		23

巻 頭 言

湘南ペガサス 25 年

シニアチーム会計担当 柳 川 明 信

昭和53年('78)に単独のチームを結成して以来25年の歳月を経て「湘南ペガサスサッカークラブ」として、40代「湘南ペガサス」、50代「湘南ペガサスシニヤ」、60代「湘南ペガサス60」の三代約100名を擁するクラブにまで発展して来ました。

この間、県下の中高年サッカーの拡大活性化の中核を担い活躍して来ました。会員諸君と共にこの25年と言うひとつの区切りを祝いたいと思います。

このように発展してきたのは、時代が日本にサッカーの風をもたらした背景と共に つぎのようなことが考えられます。

1. メンバーの年代交代が重複しながらスムーズに移行したこと。

当初の40代が50半ばとなると体力相応のゲームを求め、並行して40代が増えゆとりをもって2チームに。同じように60代へと移行し、且つ高年齢のメンバーがどのチームにも参加できるように運営に幅をもたせたこと。

またその過程で40代と50以上を別々の組織にして簡素化しながらも、50歳になればシニヤに移行できる繋がりをもったこと。

2. 新メンバーの加入に幅をもたせたこと。

「来る者拒まず、去る者追わず」とは故岩淵さんの言葉。40歳になった湘南OBに積極的に参加を求めて年代を継続させると共に、OB以外の同好の士も多く加入してもらい、これがチームの戦力強化と活性化、人的交流の向上に繋がったこと。

3. ゆるやかな運営方針と携わった人の努力があったこと。

ベースに湘南OBの先輩、後輩の流れがあるものの任意のクラブでは強制はできず(合意と話し合い)を基本とし、ややアバウトながらゆるやかに運営してきたこと。そして皆働き盛りの年代ながら運営に努めてきたメンバー、長く代表兼庶務雑事、苦情聞き役を務めてくれた故大内君を初め、歴代の幹事諸君、現幹事役員、40代の肝煎り役、グラウンドでのリーダー役、多くの縁の下での力持ちの努力があったこと。

結果として県下のみならず、50代は全国大会を目指す程の実力とメンバーを有し、60代はこの2,3年急速に広がってきた広域の大会の主要クラブになっています。サッカーを通じ相互の親睦、心身の健康増進というクラブの目的は満たされ、グラウンドに集う諸君の浼刺とした笑顔は素晴らしいものです。また発祥の趣旨である(湘南高校サッカー部)を支援するということに賛同を得た人々の集いとしても定着し、結成当時故岩淵さんから託された現役を支援する組織になりました。これはまた桑田先輩をはじめ(強豪湘南中学)の流れに繋がり、現OB会長としても感謝している次第です。

今後も継続して行くためには40代メンバーの確保、60後半以降の展望などあると思います。会の運営も鈴木先生の教え子OB中心に進めてゆくことになりますが、年代差からくる意見、考え方の相違など十分な意思の疎通をはかり発展してゆく事を希望します。

(ペガサス結成時発起人代表 現サッカー部OB会長 昭和27年 湘南高卒)

代表挨拶

「良い思い」 — ペガサス25周年に思う

湘南ペガサスサッカークラブ 代表 井上 孝

「湘南ペガサス」の発祥についてはすでに幾度も述べられているが、今日、そのメンバーの経歴はある程度多様化してきたとはいえ、その70%を湘南高校サッカー部のOBが占めていることは事実である。ある高校のサッカー部OBで、そもそもこの年齢までサッカーをやる者がこれだけいるということ、そしてそれが組織化されていることは特筆に値すると同時に、当然そうなる原因があるはずだと思う。なにかを持続するには、それに関して「良い思い」を経験することが必要なのではないか。かつて、ロンドン大学経済学部で森嶋通夫教授は、イギリスの教育が素晴らしいのは、良い人材が教育分野に行くからであり、その原因は学校で「良い思い」をした人たち（必ずしも成績の意味ではなく）が、同じ思いを与えたいと考えるからである、と述べていた。そう考えるとき、上の事象は「良い思い」の原点を多分湘南サッカーにもっているのではないかと思う。それは、サッカーそのもの、仲間、指導者、雰囲気、そして伝統に依るのであろう。

「伝統」というのはまことに捉えどころのないものだが、それを支えるものの一つとして行事やシステムがあるかもしれない。高校生のときなどは、その効用にまったく気付いてはいなかったが、毎年1月15日に行っていた「蹴球祭」の存在は大きいと、年齢を経るにつれて思うようになった。高校生にとっては、25歳も35歳も同じように見えるが、さすがに50～60歳の先輩となれば、「ああいう歳で、あれだけ夢中に、楽しそうにできるのか」という見方をする。「蹴球祭」に現役やOBで参加しているうちに、自分もあの先輩たちの年齢までサッカーをやるということが当たり前のように思えてくるのではないか。久し振りに、当日、湘南のグラウンドに来てそういう光景を見ると同時に、OBが構成している各世代のチームの存在を知って、「そうか、また始めよう！」ということになる。こうして、ペガサスに入ったOBは幾人もいる。

「よい思い」は、もちろん蹴球祭だけではなく、湘南での3年間のすべてにわたる。部史に残る成果を挙げられれば言うことはない。多分、勝った思い出がもっとも「よい思い」になるだろうから。しかし勝利ばかりでなく、多面的な「よい思い」を若人が味わい、そしてその思いが最後にはペガサスでのサッカー参加に通じるならば、よいことである。そうした意味で、OBとして現役を支援することがペガサスにとって重要であるという認識から、湘南ペガサスの「会則」に、敢えて「湘南高校サッカー部に対する支援」の一項を盛り込み、メンバーに承認されているわけである。

「良い思い」には、指導者もちろん欠かせない。ペガサスのメンバーの中では、ほんの数人ではあるが、昭和30～36年にかけて、岩淵先生とともに宮原先生に指導されている者がいる。当時、全盛時の東京教育大学のサッカー部で活躍された宮原先生は新卒の青年教師で、われわれの眼を見張る技術・体力によって、一流のサッカーとそれへの憧れを示してくださった。そして、なによりもわれわれに対して、つねに一個の人格として対応してくださったと思う。乱暴な言葉や、罵声を浴びた記憶は無い。あとから振り返ると、先生は、自らが旧制中学最後の世代であつたろうし、学校は違っても、あるいはわれわれに後輩としての接し方をしてくださったのかもしれない。そうした意味では、岩淵先生にもまたその雰囲気を感ぜさせるものがあつた。サッカーを紳士のスポーツというならば、これもまた「良い思い」のひとつであろう。

どんな組織であれ、それがヴォランタリーなものである限り、根気強く、献身的に尽くしてくれる人がいなければ、決して継続されない。その点で、わが「湘南ペガサス」における故・大内健嗣氏の存在と功績を疑う者はだれもいない。いま、アルバムを繰ると小生が高校生の時の蹴球祭での集合写真に大内先輩も当然写っており、その出会いもまた蹴球祭であつたことがわかる（もっとも、大内さんは試合にはよく応援に来てくださって、われわれに「大人の大学生」への憧れをもたせてくれたが、これもまた「良い思い」）。約20年前の肺の大手術から不死鳥のように蘇って、20数年間のペガサスを支えてくださったが、この記念誌に自ら登場しえないのは、真に残念である。改めて、ご冥福と感謝の意を表したい。

さて、「湘南ペガサス」結成時には、30～40歳台だった者たちが、すでに60歳以上になって、仕事の面でも次々と現役を退くようになってきた。わずかにゴルフ、テニスなどを除けばクラブ組織のほとんどないわが国にお

いて、リタイア後の人生で趣味を同じくする仲間たちと年中顔を合わせられることは素晴らしい。毎日家にいるようになったからとて、急に地域社会に溶け込めはしない。とはいえ、高齢化社会、先は永い。サッカーの仲間たちとの付き合いは真に嬉しく、頼もしくなるはずであり、これからペガサスが一層その存在意義をわれわれに与えてくれると思う。サッカーにおける「良い思い」は、経歴の違いはあっても、ペガサスのメンバーに共通なものであろう。この多様なメンバーが、クラブ結成50年目に、このクラブで「良い思い」をしたから続いてきたのだ、と思うようにしたい。クラブライフを楽しむには、もちろんその本拠地があるのが理想であろう。「湘南ペガサス・サッカークラブ」がグラウンドとクラブハウスをもてるようになったら素晴らしいだろうなあ、と夢のようなことを考えている。

(湘南高校サッカー部OB会副会長 昭和36年湘南高卒)

お 祝 辞

ペガサスシニアチームの今後共の活躍を祈って

前サッカー部OB会長 桑 田 孝

湘南ペガサスは、昭和53年、新制高校OBの27回から35回までぐらいを中心に結成されたチームなので、その頃40歳の者でももう65歳過ぎとなり、その活動も下り坂になって来ているのではないかと考えていた。

ところが、「今年12月 発足25年を迎えるので活動の記録を残しておこうと思っている 一筆書いて欲しい」と言われ送られた資料を見て驚いてしまった。

平成13年の神奈川県四十雀リーグは、一、二部各12チーム、三部15チームで、総当たりリーグ戦をしている。平成3年ペガサスより分かれ、50歳以上の者でつくられたペガサスシニアチームは三部に属し、14試合という苛酷な日程をこなしているのである（ペガサス本チームは二部所属）。その上このチームは平成9年より出来た神奈川県五十雀リーグ（10チームのリーグ戦）、更に50歳以上を対象に開催されている古河マスターズ大会、全国シニアサッカー大会、刈谷スーパーエイジサッカー大会等出られる試合は全部出ているのである。

“本当に よくやるよ！”である。ほとほと感心するばかりである。おそらくシーズン中の土日はサッカー漬けであろうと想像する。気狂いぶりもここまで来るともう本物である。到底旧制の連中の及ぶところではない！！

ペガサスチーム発足時の中心だった27回から35回卒の連中は、“湘南サッカーの主”と言われたガンブチさんが昭和28年湘南に戻り、定時制の英語の先生として教団に立ちながら毎日グラウンドに出ていたときの連中であり、発起人の一人である柳川君（27回卒）が岩淵さんの指名でコーチをしていたときの連中でもある。また、昭和30年になると宮原先生が着任（昭和35年まで就任）、今までのOBが監督・コーチという時代から先生による指導・監督にと変わって来た時代の卒業生でもある。

昭和53年12月17日のチーム発足の試合后、洗心亭で開かれた旗揚げの会に岩淵さんと宮原先生が出席されたいへん嬉しそうにしておられたと言うのも尤もである。

それからの湘南は、鈴木中先生（昭和36年～平成元年の28年間）の時代 イクオール ペガサス本チーム。

藤塚先生（昭和59年～平成8年の12年間） イクオール 湘南トトカルチョと続くのである。

それらのことを考えると岩淵さんや宮原・鈴木・藤塚先生達の影響が大きいことがよく判る。本当にそれらの人たちは湘南に大変な財産を残してくれたものである。

現在ペガサスシニアチームは合計74名の会員を擁しているが、五十雀リーグを中心として活動している人は実質40名とのことである。そのなかで60歳以上のものが20名以上もいる。今やサッカーは生涯スポーツとなっている。その先駆者としてペガサスシニアチームのメンバーの今後共の活躍を心より祈っている。

（前湘南高校サッカー部OB会長 第1回国体優勝チームメンバー 昭和22年旧制湘南中卒）

編者注：ご寄稿お願いの際 ペガサス全体の記録であることの説明が不足でした

お 祝 辞

ベガサス創立25周年に寄せて

湘南高校サッカー部 元顧問 鈴木 中

「創立25周年」お目出とうございます。最近はずど一緒にボールを蹴る機会もなく、メンバーの方とも一緒にする事も少なくなったので、皆様に何かの参考になればと思い、この機会に「自分史・湘南高校サッカー部史・県サッカー協会史」のほんの一部を書いてみました。

ベガサスを語るにはまずは 亡くなられた「岩淵先生」から始まります。

先生は大変頑固な方でしたが、誰よりも強く「湘南高校サッカー部」を愛した人です。(昭和55年：'80年3月4日没 70歳)

- * 昭和37年('62) 私が湘南に赴任したのが26才の時でした。その時の卒業生37回(3年4名)は牧村・小林・大林・荻野でした。38回・長谷川他7名
39回(東京リビ'カの年)・小泉他7名この3年間は「秋田国体」「岡山国体」「正月・西宮の全国大会」等県代表になり思い出の多い時代でした。
昭和40年('65)(私の30才の時)40回・山田他13名、41回・二木(旧姓井出)他13名、42回・広野他11名、43回・加納他9名、この時代は「水戸の関東大会優勝」「正月・京都の全国大会」出場等県内では数無しの素晴らしい記録が残っています。
- * 昭和44年('69) 44回・桑本他11名、初めての女性マネージャー小泉さんがいました。懐かしい時代でした。45回・浅倉他7名、46回・上野他15名、47回・小林他12名、48回・曾我・瀬戸(国体代表)他13名、49回・梁他13名、50回・六角他15名、非常に部員が多くなってきました。私も40歳になり学校内でも中心的立場で校務に関与しなければならなくなり、クラス担任等の仕事が増えて多忙になった時代でした。51回・高橋他14名、52回・志水他14名八木(国体代表)宮井(女子マネージャー・ドイツ在住)等がいました。
- * 昭和53年('78)(県サッカー協会・50周年)53回・武藤他11名、この年に「ベガサス」は生まれ、今年で25年経ちました。当時40歳台のOBのメンバーは私と同年輩以上の昭和20年代卒・旧制中学・新制高校初期の方々で現在「六十雀～」の方が中心だったと思います。殆どが「ガンさん」の教えを受けた戦後湘南が強かった時代で関東の大学リーグで活躍された方々が中心になってスタートしたのではないかと、思い起こされます。
その後54回・篠塚他14名、55回・石外他20名、56回・水上他23名、57回・沼田他11名、今年で年齢が40歳を超えるのではないかと思います。「生涯スポーツ」と言う目的に沿って、昔の名前には関係無く体力に自信がある人は是非「四十雀」をお勧めします。
58回・鷹岡他17名、59回・神崎他14名(関東大会出場)、60回・浜口他18名、61回・前田他16名、62回・田中他21名、63回・中沢他11名が昭和の最後のメンバーになります。彼等も、もう直ぐです。「四十雀」で蹴るようになるでしょう。是非「ベガサス」に誘って下さい。重ねてお願いします。
- * 平成元年(昭和64年'89) 正月に「6回目の全国大会出場」したのが私の湘南高校教諭としてボールを蹴った最後の年になりました。64回・若木・田村(国体代表)他22名が現在「神奈川県社会人リーグ2部」の「湘南トトカルチョ」と言うチームで頑張っています。此方も若手を補強して良い結果を残して欲しいと願っています。
紙面の関係で28年間全てのメンバーの氏名は書けないのでキャプテン他・・・名としましたがその代の主将の方は是非仲間をまとめて欲しいと思います。集まりがあれば連絡を下さい。何時でも顔を出すつもりです。湘南を出てから「荏田高校教頭・平安高校校長・海老名高校校長」と9年間の管理職を務め、38年間の教員生活を無事卒業する事が出来ました。(編者注：先生ご提供の年表を資料として収載)

* 平成8年（'96） 退職、神奈川県サッカー協会の理事長として最後の仕事に精を出しています。平成10年：'98年「かながわ・ゆめ国体」を無事終える事が出来、「2002・FIFA ワールドカップ」を大成功裡に終えて一息ついていきます。

* 平成15年（'03） 「県サッカー協会創立75周年」の年になります。「ベガサス創立25周年」と重なり記念すべき年になりました。日本サッカー協会も神奈川県サッカー協会も「シニアの部」の将来を見据えてここに力を入れて行きます。我々の仲間「中原弘己氏」が協会のシニア委員会のメンバーでもあり、「ベガサス」が神奈川県をリードして欲しいと思います。

勿論チームの実力も強くなければなりません、組織作り、ボランティア活動、大会運営等々シニアとして生涯スポーツの見本になるような活動を期待しています。その為にはメンバーの健康と体力作りが目的になると思います。「ウエートオーバー 暴飲暴食 煙草の吸いすぎ には十分注意しましょう。」若い頃と違って無理がききません。耳の痛い方も居るかと思いますが、「良いサッカーをやって」「良い汗かいて」「健康で長持ち」「ピンピンコロリ」で長生きしましょう。

最後になりますが現役の「スペイン遠征」に対し多額のご援助を賜った事にこの場を借りてお礼申し上げます。遠征は「イラク戦争勃発の為中止になりました」が次の機会に還わせていただきます。有難う御座いました。

これからの「ベガサス」の活躍を祈念します。

（編者注：先生の湘南サッカーとの関わりを資料として収載）

追 悼

大内健嗣さんを偲んで

シニアチーム 松 本 好 且

大内健嗣君が逝ってしまってから早いもので2年が過ぎてしまいました。“湘南ペガサスサッカークラブ”が25周年の節目を迎えたこのお祝いのときに、彼と一緒に喝采を叫び、祝杯をあげることが出来ないのが残念でなりません。

25年前、柳川先輩の東京栄転を祝う酒席で集まった、大内君、牧村君、岡田君、達と「40才代でチームを作ってまたサッカーをしよう。」の話が決まった時のこと。報告と許可をいただく為に二人で岩淵先生のところへ行き、ここでお茶の用意までして待っていてくださった先生から「是非やってくれ」とユニフォームもいただき、鈴木先生に電話をされ初試合の相手、グラウンド、日時まで決めていただいた時のこと。初戦に勝って発会式を「洗心亭」で行い、“湘南ペガサス”の命名を受けた時のこと。また二人は小学校で子供達のサッカーをみていたこともあり。（この時ペガサス第4代目の監督をした宮杉君とも知り合いました。）

彼大内君と私のサッカーを通じての思い出を書き出すときがありません。

我々の現役時代は旧制中学最後の入学生、柳川さん、栗原さん、山本さん、達が卒業された後で、コーチとして柳川先輩が毎日来て下さっていました。（本当に毎日でした。雨の降っている日もでした。）

最初は大内君は6番（左ハーフバック）をつけていたので、柳川さんからは「大内、右足でボールを蹴る事は禁止！」と云われていました。結果、彼は右利きの左足使いになったのです。後日、その効果は充分あったと思います。

当時のフォーメーションはフォワード5人、ハーフバック3人、フルバック2人の今流に書くと“2-3-5”のシステムでのチームがほとんどでしたが、湘南はフォワードを4人にしてスーパーを置く“1-3-2-4”と云うフォーメーションを岩淵先生が考案され、ポルトシステムと呼んでいました。（これは昭和31年から35年まで当時の若手OBチーム：フェニックスでも使っていました。）

この時大内君はフォワードになり、前4人の11番が大内君で9番が中原君です。これで対戦相手が4人のフォワードに戸惑っていたためもあり それなりの戦績をあげ、当時県内では小田原高校と常に優勝を争っていたのですが、昭和29年7月の神宮競技場（現国立）での東日本大会に出場し、1回戦で本荘高校、2回戦で館林高校に快勝、そして準々決勝は教育大付属高校との試合になり、雨の絵画館前の田圃のようなグラウンドで“0-4”の惜敗（？）でした。これが当時の実力でした。

この大会では大内君は2得点あげていますが、2本とも強烈なミドルシュートで後ろにいる我々には彼が蹴る前に「やった！入った。」と確信させるクリーンシュートでした。今でもあの時の彼の少し照れた様な笑顔が思い出されます。

そして“湘南ペガサス”結成後の発生期に大内君が居なかったら今のペガサスはなかったと云えるでしょう。

昭和53年の呼びかけに応じて集まったのはサッカー大好き男たちでしたが、サッカーはしたいがその為の雑務は無理と云う働き盛りの“40代”ばかりでしたから。彼がしていた仕事量は大変なもので、名簿の整理、試合の通知、相手チームとの連絡、グラウンドの手配、試合会場でのポジションの割振り、クレームの処理等々、クラブ運営のほとんど総てを一人でしていたと云っても過言ではないと思います。

彼は非常に几帳面な男ではありませんでしたが、これだけのことをするには淳子夫人の多大な協力があったのだと考えます。また、年に何回か会員相互の親睦と交流の場として彼は自宅を開放“意見交換の宴”も行っていましたから夫人のご苦労は大変だっただろうと、感謝あるのみです。

大内君、君は“湘南ペガサスサッカークラブ”の代表としてよくチームをまとめてくれていましたね。君の長年にわたる尽力の甲斐あって、今ペガサスは幹事の分業制を確立した組織を持つクラブチームとして湘南サッカーOB会の中核としても機能しています。安心して下さい。これで故岩淵先生のご希望にもそえたわけですから。OB会の会長も故天野さん、故安保さんから、桑田さん、柳川さんとなり、これからも次々に続いていくと思います。

高い天国からで結構です、末永く見守っていて下さい。そして時々私と祝杯をあげましょう。乾杯！

（昭和30年 湘南高卒）

追 悼

大内健嗣さんを偲んで

シニアチーム 松 本 好 且

大内健嗣君が逝ってしまってから早いもので2年が過ぎてしまいました。“湘南ベガサスサッカークラブ”が25周年の節目を迎えたこのお祝いのときに、彼と一緒に喝采を叫び、祝杯をあげることが出来ないのが残念でなりません。

25年前、柳川先輩の東京栄転を祝う酒席で集まった、大内君、牧村君、岡田君、達と「40才代でチームを作ってまたサッカーをしよう。」の話が決まった時のこと。報告と許可をいただく為に二人で岩淵先生のところへ行き、ここでお茶の用意までして待っていてくださった先生から「是非やってくれ」とユニフォームもいただき、鈴木先生に電話をされ初試合の相手、グラウンド、日時まで決めていただいた時のこと。初戦に勝って発会式を「洗心亭」で行い、“湘南ベガサス”の命名を受けた時のこと。また二人は小学校で子供達のサッカーをみていたこともあり。（この時ベガサス第4代目の監督をした宮杉君とも知り合いました。）

彼大内君と私のサッカーを通じての思い出を書き出すときりがありません。

我々の現役時代は旧制中学最後の入学生、柳川さん、栗原さん、山本さん、達が卒業された後で、コーチとして柳川先輩が毎日来て下さっていました。（本当に毎日でした。雨の降っている日もでした。）

最初は大内君は6番（左ハーフバック）をつけていたので、柳川さんからは「大内、右足でボールを蹴る事は禁止！」と云われていました。結果、彼は右利きの左足使いになったのです。後日、その効果は充分あったと思います。

当時のフォーメーションはフォワード5人、ハーフバック3人、フルバック2人の今流に書くと“2-3-5”のシステムでのチームがほとんどでしたが、湘南はフォワードを4人にしてスイーパーを置く“1-3-2-4”と云うフォーメーションを岩淵先生が考案され、ボルトシステムと呼んでいました。（これは昭和31年から35年まで当時の若手OBチーム：フェニックスでも使っていました。）

この時大内君はフォワードになり、前4人の11番が大内君で9番が中原君です。これで対戦相手が4人のフォワードに戸惑っていたためもあり それなりの戦績をあげ、当時県内では小田原高校と常に優勝を争っていたのですが、昭和29年7月の神宮競技場（現国立）での東日本大会に出場し、1回戦で本荘高校、2回戦で館林高校に快勝、そして準々決勝は教育大付属高校との試合になり、雨の絵画館前の田圃のようなグラウンドで“0-4”の惜敗（？）でした。これが当時の実力でした。

この大会では大内君は2得点あげていますが、2本とも強烈なミドルシュートで後ろにいる我々には彼が蹴る前に「やった！入った。」と確信させるクリーンシュートでした。今でもあの時の彼の少し照れた様な笑顔が思い出されます。

そして“湘南ベガサス”結成後の叢生期に大内君が居なかったら今のベガサスはなかったと云えるでしょう。

昭和53年の呼びかけに応じて集まったのはサッカー大好き男たちでしたが、サッカーはしたいがその為の雑務は無理と云う働き盛りの“40代”ばかりでしたから。彼がしていた仕事量は大変なもので、名簿の整理、試合の通知、相手チームとの連絡、グラウンドの手配、試合会場でのポジションの割振り、クレームの処理等々、クラブ運営のほとんど総てを一人でしていたと云っても過言ではないと思います。

彼は非常に几帳面な男ではありませんでしたが、これだけのことをするには淳子夫人の多大な協力があつたのだと考えます。また、年に何回か会員相互の親睦と交流の場として彼は自宅を開放“意見交換の宴”も行っていましたから夫人のご苦勞は大変だっただろうと、感謝あるのみです。

大内君、君は“湘南ベガサスサッカークラブ”の代表としてよくチームをまとめてくれていましたね。君の長年にわたる尽力の甲斐あって、今ベガサスは幹事の分業制を確立した組織を持つクラブチームとして湘南サッカーOB会の中核としても機能しています。安心して下さい。これで故岩淵先生のご希望にもそえたわけですから。OB会の会長も故天野さん、故安保さんから、桑田さん、柳川さんとなり、これからも次々に続いていくと思います。

高い天国からで結構です、末永く見守っていて下さい。そして時々私と祝杯をあげましょう。乾杯！

（昭和30年 湘南高卒）

追 悼

佐伯修三さんを偲んで

シニアチーム 佐 野 碩

佐伯さんは、平成13年の郡市リーグ戦（50才以上）に秋まで活躍し、納会には「不整脈の検査が続けている間は休みますが、試合の観戦や会合には参加します」と何時ものように元気に歓談していました。

然し、翌年の平成14年1月18日に自宅近くでテニス中に倒れ、直ぐに入院治療に専念されましたが、ご家族はじめ、多くの方々の願い、再起の祈りも叶わず3月30日に永眠されました。

還暦を迎え人生はこれから、そして湘南ベガサスシニア50才チームの助っ人に加え60才チームの強力メンバーとして大いに期待されていたのに残念でなりません。

佐伯さんは中学時代（栄光学園）から始めたサッカーを人生の友とし、その強靱な身体は「鉄人」とも言われていました。

ベガサスに参加した平成3年以降、同世代の井上会長と共に守りの要に徹し、大胆な接触プレーで起り勝ちな感情的場面で、彼は、いつも冷静に対応し、模範的なフェアプレーヤーでもありましたので、チームの逸材を失ったと思います。

ご家族のお話では、サッカーの試合があるときは、いつも「上機嫌で」出掛けていたと伺いました。

また、ご葬儀にはベガサスのユニホーム姿で旅立たれました。先年他界された故大内代表も同じユニホーム姿でお別れしたことを思い起こし、湘南ベガサスを終の仲間として、こよなくサッカーを愛していたことに感銘を受けました。天国では、大内さんとベガサスの試合を見ながら語り合っていることと思います。

佐伯さんを見送って一年が経ちました。謹んでご冥福をお祈り致します。

（昭和28年 栄光学園高卒）

監督の回想

1. 湘南ペガサス（クラブ内呼称「ジュニアチーム」）

1. 1 監督の悩み

平成5年～7年

ジュニアチーム監督 田部 井 徹

今から約10年位前になるが、湘南ペガサス（ジュニアチーム）の監督を3年間務めることになった。大学3年の時にキャプテンを務めた経験があったせいかな、割と簡単に引き受けてしまったが、実際にやってみると結構これがシンドイものであった。学生時代には部員が40人位いたと思うが、何しろ学年が物を言う時代であり、またサッカーを楽しむということ以上に、試合に勝つことが第一優先になっていたため、試合に出られる人、出られない人が当然いて、特に1年生なんかは、試合当日ボール運びだけで終わってしまうことがほとんどだったが、自分達も学年が上がれば、今の先輩のようにプレーできるという考えがあったためか、誰も文句を言わずに部活を共にしたものであった。

ところが社会人のクラブチームとなると、個々人のサッカーに対する考え方が異なり、試合の勝ち負けに徹底的にこだわる人、試合の勝ち負けより純粋にサッカーを楽しみたい人、ただ単に健康作りの観点から休みの日を利用して気分転換を図っている人など、人それぞれの考え方が混在する。そんな中で試合を行なう訳であるから、監督として誰しも一番頭を悩ますのが、メンバーの人選である。特にプレーイング・マネージャーともなると、なおさらのことである。試合に参加する人数が15人ぐらいであれば、何も悩むことはないが、参加人数が20人以上となると、これはもう大変なことになる。試合の始まる前からスタメンはどうしよう、誰と誰を途中で交代させようかなど、試合前のアップもろくにできず、また試合中もプレーをしながら選手交代のタイミングを考えるなど、なかなかプレーにも集中できないのが現状であろう。

私が監督をしていた時の湘南ペガサスの場合も、例外ではなかった。この背景には、特にこの10年ぐらいの間に、シニアリーグでプレーすることを望む人が、急激に増加してきたことがあげられる。サッカーを愛する仲間が増えることは嬉しいことであるが、反面、監督にとっては悩みの種にもなっている。

試合に来る人は誰しもが、今日は自分が試合に出て何かチームのために貢献しようと、やる気満々で来るわけである。ところがメンバーが大勢集まりすぎると、頭を悩ませるのが監督ということになる。試合に勝つことを優先させれば、何も全員のことを考えることもなく、当日のベストメンバーで試合に臨めばよい訳であるが、湘南ペガサスは従来から、試合に来た人はたとえ時間が短くとも、必ず全員が参加することをモットーに試合をしてきた。それでも当然ではあるが、試合をやるからには必ず勝ちたいと思ってやっているのだから、これは欲張りとも言うしかないのであろう。そこが監督として一番辛い所であり、勝てる試合をみすみす落とすという苦汁も実際に味わった。誰しも試合をやる以上は勝ちたいのは当たり前であるが、それ以前に誰しも試合に出たいというのが、メンバーの共通した願いである。だからこそ監督稼業は辛いのである。

ただ唯一監督が救われるのは、監督が決めたことに對し誰一人文句も言わずに従ってくれることである。これがなければチームとしての統制などとれるはずもなく、やがてはチームが分解しメンバーもそれぞれバラバラになって、同じ仲間としての活動が出来なくなる。やはり監督はいかに辛くとも、試合の勝ちにこだわりながら、全員を上手く起用することを考えるしかないのであろうか。

（昭和42年 湘南高卒業）

1. 2 ペガサス入会から10年を振り返る

6年振りの3位入賞から1部転落まで

平成8年～9年

ジュニアチーム監督 浅 倉 泰

私がベガサスに入会したのは、40才を迎えた翌年平成4年（1992）の春です。同期の山口晴夫がOB会の世話役をやっていた関係で、ベガサスのメンバーとも面識があり、一緒に入会しようとの誘いがありました。腕試しならぬ足試しに呼ばれたのは、確か4月頃の鎌倉四十雀との練習試合だったと思います。それまで、サッカーの方は会社（東急不動産）のチームに所属し、年に2回、東急グループの大会と不動産の同業者のリーグに参加する程度で、思い出したように試合をしていた状況でした。但し、40才の記念にホノルルマラソンに挑戦しようと39才の夏から走り込みを行い、結果的には直前に膝を痛めて参加を断念しましたが、サッカーを始めるだけの基礎体力はついていました。その下地があったからこそ、ベガサスに飛び込んでいったのかも知れません。しかし、その年の古河マスターズにいきなり参加し、1日2試合の洗礼をうけて、サッカーはただ走るのとは大違いと言うことを身にしみて感じました。二日目は歩いて試合会場に行くのがやっとという有様でした。

そんな形でスタートしたベガサスでのサッカー遍歴ですが、2度ほど怪我でもう続けられないのではないかと思います。最初は始めて2、3年目だと思いますが膝が痛くなって、なかなか直らずに鍼灸なども試みましたが、芳しくなく、これはサッカーを止めるということかな、などと落ち込んでいました。いろいろ調べてみると、膝の痛みを解決するには膝の周りの筋肉をつけるのが一番いいという事がわかり、スポーツクラブに通って、スクワッド等の筋力トレーニングに励みました。その甲斐あって、膝の痛みは解消していきました。

次は肉離れです。試合中に相手ボールをインターセプトしに前に出たときに、服ら脛をバシッと後ろから蹴られたような感じがして、激痛が走りその場にうずくまりました。サッカー人生初めての肉離れです。肉離れは安静にして、完全に直るまで、無理をしないというのが唯一の治療法なのですが、つつい中途半端な状態で運動を再開して、また同じところを傷めるということを何度か繰り返してしまいました。この時はテーピングに救われました。キネシオテープと普通のテープを組み合わせ、少々大げさにみえるかもしれませんが、試合前に必ず丁寧にテーピングをします。これによって、筋肉の無理な動きを押さえて、筋が切れるのを防いでくれるわけです。これを始めてから、一度も肉離れをやっていませんから、効果は絶大だと思います。肉離れをしやすい人にはお薦めします。

さて、怪我の話ばかり書いてきましたが、そろそろ本題に入りたいと思います。

私が田部井さんから監督を引き継いだのは、平成8年（1996）の第13回四十雀リーグからです。その前は7位、6位、6位と一部の中位に位置していました。横浜、神奈川、茅ヶ崎にはどうしても勝てず、その他取りこぼして1、2敗するというパターンで戦績は安定していました。第13回リーグも同じような展開でしたが、このシーズンから加わった、アンテロープス出身の二見氏、藤田さんの紹介で加わった白井氏（1シーズンのみ）、及び前年から参加した関、福永両氏の4人の戦力が非常に大きな力を発揮し、横浜、神奈川、茅ヶ崎以外は取りこぼしをせずに5勝3敗1分けで第3位に入賞しました。勝った試合5試合の内4試合が1-0の試合とギリギリの所で勝ちを拾っての3位でした。4位の横須賀とは勝点は同点で、得失点差が相南+1点で、横須賀±0点での本当に僅差の3位でした。この3位入賞は第7回大会以来6年振りの快挙となりましたが、メンバーの実感としては、知らないうちに3位になっていたという感じだったのではないのでしょうか。

平成9年（1997）は福井（民）、伊通、相羽氏がシニアに移り、新メンバーが10名入ってきましたが、旧メンバーとのコンビネーションがうまく噛み合わず、2勝5敗2分けの8位で危うく2部へ転落するところでした。

平成10年（1998）は更に藤田、阿部、田部井、坪井氏などがシニアに移り、新旧交代のシーズンになりましたが、残念ながら新チームが旨く機能せず、1勝9敗、その1勝も不戦勝と実質的には全敗で終わり、2部への転落が決まってしまいました。

新メンバーへベガサスの戦い方を打ち出せなかった監督である私の責任が大きかったと思います。OB以外の会員が多くなり、現役時代の湘南高校でのサッカーが暗黙の了解事項となっていた時代から、チームとしての戦い方を明示して試合に臨まなければ勝てない状況に変化していました。その点、私がバトンタッチした関氏はこの点を意識して取り組んでいただき、2年後の1部復帰を達成してくれました。このシーズンから、新メンバーが早くチームへ溶け込んでもらえるよう、出来るだけプレー時間を確保したいと思い、私の方からお願いして、50才になる方はシニアの方へ上がって頂くことにしました。その際、きちんとした送別会も開催せずに、電話連絡だけで終わらせてしまったことは、今も心残りです。この場を借りて、諸先輩にお詫びしたいと思います。

私が監督をしていた間に印象に残ったイベントが二つあります。

一つはJビレッジへの遠征です。メンバーの河西氏の紹介で地元福島の大葉四十雀ともう2チームが参加し、4チームで親善試合をやることになりました。平成9年（1997）年の7月にオープンしたJビレッジの素晴らしい芝を一度踏みしめてみたいと、我々はバスを仕立てて朝7時に藤沢から出発しましたが、遠いこと、遠いこと。

今は高速がもう少し伸びているかもしれませんが、高速を降りて行けども、行けども到着しません。ようやく着いたのが午後1時半ですがそのころには、くたびれ果てていました。2度と車では行くまいと思いました。しかし、施設に入ると見渡す限りの芝のグラウンドで、ようやく日本にもこの様な施設が出来たかと、感慨ひとしおでした。その後行く機会は有りませんが、あと10年サッカーを続けていればベガス60の大会が有ると聞いておりますので、その時を楽しみにしております。

もう一つは御殿場、時の栖での合宿です。たしか当時シニアの方から「芝の素晴らしいグラウンドが有るから、一緒に行かないか」とお誘いを頂き、御一緒させていただきました。この時はグラウンドも素晴らしかったのですが、それ以上に地ビールとソーセージの味に皆感激しました。その時の印象が強かった為、シニアのサッカー大会の企画会社から、この施設を使った企画を提案されたときには、直ぐに申し込みをしました。それ以来ジュニアの秋の恒例行事となり、サッカー、温泉、地ビール、ソーセージを楽しみにして毎年参加しています。

メンバーとして、監督としてこの10年ベガスに参加して来ましたが、何故これほど入れ込んでいるのかと自問することがあります。まあ、他にやることがない、仕事さほど忙しくない、など消極的な要因がもちろんありますが、根本的には闘争心の発露にあると思っています。日常の社会生活の中ではなかなか正面切って勝負することは出来ませんが、ゲームの中では熱くなってファイトすることができます。この熱くなれる時間が私にとって、とても貴重な時間なのだろうと思います。

先日、昨年から加入した私の同期が、酒井大先輩の軽快なプレーを目の当たりにして、何だあの爺さんはと私に聞いてきました。ベガスの現役最長老だと知って二度びっくり。これから先、相当長い道のりになりますが、私も酒井大先輩を目指してサッカーを続けていきたいと思っています。

(昭和45年 湘南高卒業)

1. 3 ジュニア監督の思い出

平成11年～13年ジュニアチーム監督

関 佳 史

先日、私の恩師で、湘南高校陸上部の元顧問、山田勉先生とお話する機会がありました。先生いわく「サッカー部はいくつになっても試合ができていいよな。本当にうらやましい。中年が本気で記録に挑む陸上競技は不可能だ。陸上部のOB会はイコール飲み会にならざるを得ない。」まったく、自分では気が付いていませんでしたが、サッカーを年齢相応に楽しむことができるのは、とても幸福なことと改めて思います。この年齢になっても、グラウンドにたち、汗を流し、気持ちも体もリフレッシュでき、仲間と語りあえるスポーツができることは、大げさにいえば、会社や家庭とは別の大きな自分のテーマになっています。

40雀リーグの組織が20年、チームが25周年を迎えるにあたり、まず、先輩がたの熱意とご苦勞に感謝と敬意を表します。私たち、ジュニアチームの活動が順調におこなえるのは、リーグ組織やチームを作り、運営してきた皆さんがあってのことです。

さて、私は1999年、2000年、2001年の3年間、監督をやらせていただきました。世紀の変わり目であり、チームにとっても転機でありました。

1999年のシーズンは、初めて2部に降格した年でした。この年は、出足はよかったのですが途中でつまずき、立て直しがきかず、5位という不本意な成績に終わりました。2000年のシーズンでは出足こそ悪かったものの、その後6連勝し、2位を確保。1部復帰を決めました。年間の失点4に象徴されるように、守備が安定。とくに元脱売クラブのGK野口さんは素晴らしいプレーをみせてくれました。2001年は1部で結果11位と振るわず、再度降格ということになりました。若手、藤塚さんの前後の世代が集れば、かなりの力があるものの、忙しい中ベストメンバーがなかなか揃わず、歯がゆい試合が多い1年でした。

監督を最も真剣にやったのは、1部のときでした。前のり偵察を行い、相手のフォーメーションと選手をチェックしました。(仕事で余裕があったのも幸いでした)成績は振るいませんでしたが、相手のフォーメーションを読んで、こちらの理想どおりに試合運び、上位チームに勝った試合もあり、監督の面白さを感じました。ただ、夏の暑い日など、プレーしながら交代を考えていると、どうしてもうまく頭が働かず、時間がたつてしまい、後悔することも多々ありました。交代の難しさは、いつも頭を悩ませます。勝負には勝ちたいと思いながらも、来てくれたメンバー全員を出したい。考えても解決できないことが多々ありました。

40雀リーグ全体としては、チーム数が増加する中、社会人でずっと継続して30代もやっているチームが新加

入ってきます。また、関東リーグクラスで継続してやっている選手も見受けられます。一方、湘南OBは、10年くらいのブランクのある人が多く、勝負となると、非常に厳しいのが現実です。

また、チーム内の事情も大きく変わっています。ベガサスは、湘南高校OB主体のチームではあるはずですが、現在、登録メンバーでは、約半分以上がOBになってはいます。しかし、常時リーグ戦に出場している比率でいうと、30%をきるくらいになっているのが実態です。今後、数年にわたっても、新規OBの加入見込みは1年に1人いればよい方とみています。従って、OB以外の参加者をどう受け入れていくかが大きな課題となるはずですが、3～4年前までは、湘南OBがかかわったアンテロープスから、かなりまとまった人数が加入してくれていました。現在は、幹事を中心に、個人的にやれそうな人に声をかけています。

チームのメンバーは皆さん、本当にサッカー好きです。そして、サッカーを継続していくことは大切なことです。真剣勝負も時には必要ですが、遊び心をもって、今後もサッカーを楽しみたいと思います。

(昭和48年 湘南高卒業)

1. 4 ジュニアと呼ばれる四十雀

平成14年～現在

ジュニアチーム監督 元 松 経 男

過日、神奈川県都市サッカー連盟主催のシニアリーグ創立20周年祝賀会が藤沢市民会館で盛大に執り行われました。平成14年度よりベガサスジュニアの監督を仰せつかった私も、チームの代表としてその祝賀会に参加しました。シニアリーグすなわち私たちの参加している都市四十雀リーグは全国的にも初期の創立の歴史を持つとのこと。その参加チーム数も年々増え続け、今や45チーム3部制（3部はA・Bの2グループ）となり、来年度はいよいよ4部誕生かとの勢いがあります。そのような壮年サッカーの盛んな神奈川県の中でも、いち早く四十雀サッカーが始められたのが我が湘南ベガサスであり、都市リーグの創世期から湘南ベガサスはリーグを盛り上げていたと伺っていました。

このような歴史のある「湘南ベガサス」の名前を私が初めて耳にしたのは、湘南クラブでボールを蹴っていた学生時代のOB会だったと思います。その頃はまだ高校を出たてで体力もそこそこにあり、現役に胸を貸していたころでした。夏の合宿中のOB会や正月の蹴球祭などで、大階段の上から四十雀の皆さんのゲームを珍しく眺めていたものでした。スピードこそ遅いけれども、しっかりとした技術で予想以上のハイレベルの試合だったものと記憶しています。特に安保大先輩のプレーや服部大先輩の軽やかなGKぶりが今でも目に浮かびます。それと共に、岩淵先生の怒鳴り声も思い出すのは私だけではないのではないのでしょうか。こうした昔を思い出すに、今の自分たちの姿が現役の皆さんにどのように見られているのかと思い比べると、少し気恥ずかしささえ覚えてしまいます。

そのような、湘南高校サッカー部とそのOB会と共に歩んでこられた、湘南ベガサスの諸先輩方の輪に初めて入っていただいたのは、平成8年でした。なんとその年のリーグ戦（もちろん群市1部リーグでしたが）では5勝3敗1引き分けて、堂々の3位入賞。私のサッカー歴の中で唯一、あの八咫鳥マーク入りの賞状をいただいた記念すべきベガサスデビューの年でした。なんと強いチームなのだろうと思いつつ、「体力とテクニックの再構築に挑戦しよう」と誓ってその年のOB会報にベガサス1年生の原稿を載せていただいたのがついこの間のような気がして仕方ありません。

そして、気がつくとベガサス入会後すでに7年がたち、その間リーグでは1部から2部へ転落し、すぐに返り咲いたものの、世代交代が思うようにいかず、リーグ戦での参加人数も不足がちとなり、再び2部に転落してしまいました。2部転落後の平成14年には、それまで引き受けていた会計係りから突然監督に指名され、気疲れの多いシーズンを過ごしてしまいました。少年サッカーのコーチをやっているため、先発メンバー決めや選手起用は慣れているだろうとの理由から、監督を仰せつかったわけですが、いきなり連戦連敗でリーグ戦の最後まででははらのし通しでした。最終戦でかろうじて2部にとどまった次第ですが、その詳細はOB会報にも載せていただきました。

さて、こんなハラハラドキドキの都市リーグではありますが、ベガサスジュニアにはたくさんの楽しみもありました。まずは、古河市マスターズサッカー大会。これは例年恒例の大会でしたが、ジュニアにとってはシニアや六

十雀の諸先輩方と同宿し、サッカー談義の一晩が約束された、年に一度の緊張の大会でした。高校の現役時代にも、大学生の湘南クラブの時代にも、いつも先輩に鍛えられ、叱咤激励されていたのが湘南サッカー部の伝統でしたが、ここでもその伝統は生きていました。近年は参加人数が集まらずに、シニアチームからの応援をお願いしての参加が続き、遂におしかりを受けて、昨年からは参加を見合わせています。またいつか人数をそろえて同宿の参加に踏み切りたいものです。

最近では御殿場マスタースへの参加が恒例化しています。秋の清々しい富士山の麓で天然芝でのゲームと、試合後の温泉と地ビール。これは堪えられません。普段、様々な形でご支援いただいている若手シニアの皆さんにも、ゲスト参加していただき、評判も上々です。是非、続けていきたい年中行事です。

そして、筑波大附属高校の定期戦や蹴球祭、小田原高校OB会との交流戦等々、1年中サッカーを楽しませてくれる湘南ベガサスの歴史と世代を越えた暖かな交流がこれからも代々末永く続くことを期待して、次の監督まで引き継ぎたいと思います。

(昭和49年 湘南高卒業)

2. 湘 南 ベ ガ サ ス シ ニ ア

2. 1 平成5年度の活動報告

平成5年度シニアチーム監督 中 原 弘 巳

平成5年は丁度10年前です。当時のベガサスシニアメンバーは61歳の酒井さんから50歳になろうとしている牧村さんまでですから、今では丁度60チームの年齢にスライドしています。実際その時の多くのメンバーがそのまま今のベガサス60チームで活動しています。ベガサスは年齢の変化に応じて、ジュニアチームの編成や50代、60代チームのスタートとチーム活動の場を広げ、新しいメンバーを入れながら各人が継続的にベガサスの活動に参加してサッカーを楽しんで来たわけで、素晴らしいことと思います。

当時はまだ50歳以上のチームが数少ない中で、ベガサスシニアはオーバー50のチームとして、すでにスタート3年目を迎えていました。40雀リーグ2部に参加しながら、50歳代中心の試合を目指していた年です。山本修さん等の働きかけで、50雀リーグのトライアルを開始したのがこの年でした。参加チームはベガサスの他に神奈川、藤沢、YK、小田原でしたが、ともかくこれが50雀リーグの始まりで、その後数年して神奈川50雀リーグの発足となりました。県外にも相手を求め、川口、浦和、東京、山梨の50代チームと対戦しました。

湘南OBとしては古くから旧制中学OBチームとしての活動がありました。ベガサスとこの旧制OBとの合同での試合も行っています。結果的に、これが旧制OBチームをベガサスが引き継ぎながら、ベガサス60代チームを作っていくことに繋がりました。

40雀リーグの戦績は2部13チーム中11位、50雀リーグは1勝2敗1分け、全体では6勝17敗9分けでした。戦績は芳しくありませんが、50代の試合環境が充分でない中で多くの試合をやったと思います。

現在、小学生から高校までサッカーは広く普及しています。しかし、高校卒業後の競技人口はその割に多くないようです。30代ともなれば、サッカーどころではないし、50代になって再びサッカーは始め難いのが現状だと思います。

ベガサスやSOIの遠征で、訪れたオーストラリアや英国では、生涯を通してサッカーを楽しめるシステムがあるように思えました。彼らは、クラブ組織や自前の芝生グラウンドで日常生活の一部としてサッカーを楽しんでいます。サッカー協会も最近は地域クラブ作りを始めようとしています。岩淵さんもこれに通じることを考えておられたのかなと思います。日本の生活習慣や不十分な設備環境ではこのようなことを実現するのは難しいのですが、ベガサスの活動方法が一つの方法だと思います。湘南を卒業しても、サッカーを生涯を通して続けることの出来るシステムを作りたいものです。

平成5年のチームに戻りますが、長年ベガサスをマネージした大内さんが、この年は連絡係りとともに毎試合元気な姿を見せていました。佐伯さんはベガサスシニア設立以来の中心メンバーとして堅実な守備を誇っていました。

サッカーをこよなく愛したお二人を失ったことは、まことに残念です。お二人のご冥福を祈ります。

(「60」チーム監督 昭和30年 湘南高卒)

平成5年度ペガサスシニア試合結果 (県四十雀および五十雀リーグを除く)

*は湘南OBとの混成

	対 戦 相 手	得 点		
4月11日	慶応OB	3-4	親善試合	*
5月15日	古川おじんSC	0-2	40雀記念大会	
同上	大和四十雀	1-1	同上	
5月16日	旭四十雀	0-1	同上	
同上	川崎四十雀B	0-7	同上	
5月23日	荻野バイオレット	1-0	対女子チーム	*
同上	城北ラビット	6-0	同上	*
6月20日	慶応OB	1-1	親善試合	*
10月17日	川口四十雀	2-0	川越50雀大会	
同上	浦和パル	0-2	同上	
10月24日	慶応OB	1-1	親善試合	*
12月11日	小田高50雀	0-0	小田原大会	
2月20日	寒川40雀	0-7	40雀トナメント	
3月21日	東京40雀	0-1	東京大会	
同上	同上	0-0	同上	
同上	山梨40雀	1-1	同上	

(以上)

2. 2 現 場 呼 出 し 役

平成6年度シニアチーム監督 篠 田 亮

平成6年度('94)シニアチームの監督を仰せ付けられました。見識・技量共に相応しからざる者が務める事になりましたが、監督は気が向いたときだけ出て行きプレーを楽しんでいるわけには行かず、KO時には来ていなかった人をも含む当日参加者全員の出場のためプレー中もポジション別交代の時期を考えなければならない面倒な役割でもありますから、年回りから回ってきた呼出し稼業のお勤めとして仰せに従いました。

9年も前の事で定かではない記憶を辿って見ます。ジュニアチームが出来、ロートルは2部リーグに移り4年目、40代中心のチームが殆どのうえ、此方は年々加齢し、苦戦が続いていた頃です。勝の期待が持てるのは事情同様の神奈川クラブぐらいと言う状況でした。今記録を見ると、2部参加の初年度から順に、11チーム中9位、12中12、13中11位と来て、この年は13中12に終わっています。年の差は如何ともし難い、楽しめば良いとお思いかもしれませんが、勝がなにより嬉しく楽しいものであることもおわかりでしょう。随分悩みクラブの先達にもご意見を求めたり、ペガサス通信に感想を記したり、留意したいこと(注参照)を呼びかけたりも致しましたが、先記の通り残念な結果に終わりました。ただこの頃から動き始めていた50雀のゲームで好成績を納めたのは、40雀での挑戦が体力の錬成になっていたおかげかも知れません。

省み、今とこれからに思いを致しますと、変わらぬ難問はペガサスのようなクラブでの競技力維持乃至向上は如何すれば良いかと言うことです。クラブ内の人間関係は現状でも満足すべき水準にあると思います。しかしそこそこには凱歌をあげて共に慶び楽しむ機会を確保し、「できたら今以上」を望むのは決して贅沢ではなく、ある意味ではスポーツクラブの性であり求心力の柱ではないでしょうか。他方 まだサッカーがマイナーで競技人口が少ない頃ではあったにせよ上位に在ったころの湘南高校OB世代ではそれなり成績を収めてもこれからは難しくなる一方と思います。

では如何すれば良いか。少年のころとの違いに目をつけてみたい。まずゲーム機会に恵まれています。またレベルの高いゲームを見聞できます。これは今からでもチームプレー能力を向上させる可能性を示唆していませんか。少し希望が見えてくるでしょう。ただこれだけなら他チームも同条件です。問題はプレーヤー相互間の関係です。日本人や高年者が共通して不得意なディスカッションを通じての相互理解が必須になります。プレー中でなければ

状況を再現できず互いの意思疎通が難しいこともあります。Eメールによる掲示板やメーリングリストなどの利用も文章化による抑制された表現が期待できるという意味で一策かもしれません。この辺り成果の挙がる話合いが出来るようになったところが勝利の美酒を多く酌めるようになるのではないのでしょうか。ジュニアも含め当クラブの課題ではないかと考えます。(勿論個人で持久力や筋力維持の努力は心がけたいものです。)

回想には程遠い話になりましたが楽しいクラブを維持しつつプレーの喜びも極大にしませんか。

末筆になりましたが長くアフターゲームを共に遊んで下さった大内さんのご冥福を祈って、合掌。

(昭和33年 湘南高卒業)

(注) サッカーで自ゴールを向いたDFは殆ど無力化します。これは攻撃の要諦を示唆しています。ボールの動き、人の狙いはここにあるべし。などと考えた当時の想いは今も変わっておりません。最近、ボールウォッチャーとなってしまう絶妙な位置修正のないサッカーが気になっています。昔話にかこつけた戯言をご容赦下さい。

2. 3 平成8年度の活動報告

平成8年度シニアチーム監督 山 本 修

湘南サッカー部OB会報に掲載の活動報告を、そのまま記念誌の寄稿とします。

1. 湘南ベガサスシニア

神奈川県四十雀リーグの参加チームも年々増えて30チームになり、平成8年度('96)から、1部、2部、3部各10チームの3部制となった。50才以上の湘南OBおよびその友人・知人で構成されている我が湘南ベガサスシニアチームは、参加資格40才以上の四十雀リーグの中では最高年令で常にビリ争いをしていることから当然3部所属であり、平均年令が10年若いチームを相手に今年も苦戦の連続ではあったが、0勝5分4敗の戦績で10チーム中9位の成績はまずまずといえる。特に40才代前半の若手を揃えた新規加入の岩崎中OBと対戦して無失点に抑えた試合など、5回の引分試合では守備陣の健闘が称賛される。

現在のメンバー構成では四十雀リーグの中での対戦は年々苦しくなるばかりで、これからは四十雀リーグを続けるためには50才になった若手メンバーの新規加入が望まれる。

古河マスターズ大会など50才以上チームとの試合は8戦4勝2分2敗の戦績であり、なるべく同年配同士の試合機会を増やしたいと考えている。

五十雀リーグを目標に数年前から50才以上チームの交流試合を提唱し、3年前から6チームが参加してはいるがなかなか軌道に乗らず、今年も公式には1試合実施されただけであった。11月の四十雀リーグ代表者会議で、県協会事務局が来年度から五十雀リーグ発足をアナウンスしているので、ようやく本格的スタートとなりそうである。

2. 60才以上の刈谷スーパーエイジ大会

参加資格60才以上の第3回刈谷スーパーエイジ大会には、60～64才の湘南ベガサスシニアのメンバーと65才以上の湘南OBとの混成チームで今年も参加した。

第1戦には初参加の韓国釜山チームと対戦し、噂に聞いていた通りの強豪で0-5の完敗であったが、翌日の茨城とは引き分け、最終戦浜松との試合には勝って、総合成績は1勝1分1敗の五分で終わった。

3. 付属・浦和・湘南の3高校OB交流会

旧制中学選抜蹴球大会(名門中)に替わって、付属、浦和、湘南の3高校のOBで60才以上/50才以上の各2チーム参加の交流試合が企画され、FUSサッカー交流会の名称で、第1回が11月23日に開催された。好天と芝生の良いグラウンドに恵まれ、戦績は60才2勝、50才1勝1分、合計3勝1分の快勝で、この好成績は上記のように湘南ベガサスシニアの四十雀リーグ加盟や60才以上の刈谷大会参加により継続的にサッカーに親しんでいることの効果が現れたものと考えられる。また、早川純生(18回)、早川次郎(20回)、小林忠生(23回)の早川3兄弟が揃って出場し、対浦和戦でそれぞれ得点を挙げられたのは特筆に値する活躍であった。

60才以上が19人も参加したのに対し、50才代は8人しか集まらず、60才以上から4人が50才代試合にも重複出場した。参加資格が湘南OBに限定されていることによる人数不足で、湘南ベガサスシニアチームがOBだけに限定しては成立しないことをあらためて痛感した次第である。

来年以降もグラウンド確保可能なら春秋年2回の開催が目標とされており、来年度は湘南OBの新しいメンバーが参加されることを期待している。

(昭和27年 湘南高卒)

平成8年度ペガサスシニア試合結果（県40および50リーグを除く）

（1）神奈川県四十雀3部リーグ

9戦 0勝5分4敗 10チーム中9位

詳細は資料として収載

（2）第6回古河マスターズ大会50才以上の部 4戦 1勝1分2敗

6月1日 湘南 1-0 東京五十雀

湘南 1-2 平成四十雀（栃木）

6月2日 湘南 0-2 ヴェールソレト和田

湘南 1-1 川口四十雀

（3）県スポレク五十雀

10月27日 湘南 1-1 神奈川五十雀

（4）第3回刈谷スーパーエイジ大会 3戦 1勝1分1敗

10月5日 湘南OB 0-5 韓国釜山

10月6日 湘南OB 1-1 茨城四十雀

湘南OB 2-0 浜松快童クラブ

（5）第1回FUSサッカー交流会 4戦 3勝1分0敗

11月23日 湘南50 0-0 付属50

湘南50 4-2 浦和50

湘南60 1-0 付属60

湘南60 5-1 浦和60

（以上）

2. 4 監 督 の 記

平成10年シニアチーム監督 平成11～12年シニアチーム副監督

植 田 興 義

「心地よい疲労が何ともいえない」 いつまでもサッカーを続けたい————の文章で締め括って、平成10年、監督一年目の12月のOB会報に活動報告してから、平成12年までの3年間監督をさせて頂きました。その間まずまずの成績をおさめられたのはメンバーの皆様のご協力の賜と深く感謝申し上げます。

しかし、まことに残念だった試合が一試合ありました。人数不足で棄権したことです。監督として一番悲しいことです。サッカーは11人以上集まらないと試合になりません。

湘南ペガサスサッカー——クラブは、柳川さん、松本さん、大内さん、牧村さん達が中心になって立ち上げたと思っています。その年代の人達だけで試合をして行くと段々きつくなります。働き盛りの四十代、五十代で常時試合に参加するということは非常に困難なことです。どうしてもメンバーを増やしたい。そのためには若い人に監督をやって欲しいということで、阿部さん、北原さんに監督をバトンタッチしました。

その後は若手の加入者が段々と増えて行き、最近では20人近く参集することも多々あるようになり、監督としては贅沢な悩みを持つというおまけがつき、非常に喜ばしいことです。

いくら、サッカーをやっていれば楽しいといっても、試合に負けてばかりいてはつまりません。やはり勝ちたいと思うのが本音だと思います。

また年々60雀のチームが増えていきます。そこでも湘南ペガサスは活躍しています。数年後には70雀リーグも開催されることでしょう。

サッカーは健康なオジさんにとっては長いこと出来るスポーツです。各世代のメンバーがつながることにより、長い間他のします。「ノミニケーション」もチームが継続して行くうえで重要なファクターであると私は考えます。試合の反省、各人の性格、各人のサッカーに対する思い等々、いろいろなコミュニケーションが図れます。メンバーの皆様には是非お勧めします。

湘南ペガサスサッカークラブは永遠に不滅です！！！！

（昭和36年 湘南高卒）

2. 5 監督の記

平成11年シニアチーム五十雀リーグ監督

山 本 豊

昨年のワールドカップは、私なりに大いに興奮もし、楽しませてもらいました。Jリーグ発足以降、日本でのサッカー熱も上方で固定、安定化したように思います。

今日のこのサッカーの興隆の基を築いたのは俺たちだという気持ちを、我々は一様に持っているのではないのでしょうか。私なども、ささやかだけどサッカーの種まきもやった、という気持ちがいまだに抜けません。おまけに「この歳になって朝早くから、サッカー用具一式をかついで、いそいそと出かけているのです」という話をなかば得意になって、人様に吹聴したりして、まったく……、というところですよ。

私に言はせれば、ベガスシニアの仲間は全員私以上のサッカー狂で、サッカーに関する知識全般は言うに及ばず、ワールドカップクラスの試合分析から戦術解説まで、更には選手個人の特性、能力にまでおよび、まさにサッカーに関しては免許皆伝、脱帽という面々と言えましょう。ただし、この知識、戦術と自分たちの試合とを照合すると、多少のズレがあるのですが、点が入って勝ち試合にでもなれば、これは全部実践できた、と皆思っているところが、わがチームの気分のよいところでしょう。

この流れが良い方向に出たのが、平成11年度の五十雀チームで、この年の県下リーグで優勝しました。その翌年から優勝チームは県代表として、全国大会への出場権をもらえる、という発表があり、一同くやしい思いもしましたが、納会では気分のよい酒を楽しみました。たまたま私が監督を仰せつかった年でしたので、私にとっても納得の行くいい年でもありました。ただし、最終戦の頃グラウンドに集まった全員に試合に参加してもらうべく、試合開始直前まで選手交代のプランを練っていたため、準備体操無しで動いたのがあたり、開始早々左足首骨折、という騒ぎのあった年でもありました。

昨年あたりからは六十雀の試合が増え、嬉しいかぎりです。県内リーグ戦はもとより、全国規模の大会も充実しつつあり、六十雀の試合だけでスケジュール表が埋まるようになりました。歳を重ねても、同じ仲間とその歳なりのサッカーをいつまでも楽しめる、というのはすごい事ですね。いつまでも「日本のサッカーを支えているのは、俺たちだ、ベガスシニアを支えているのは、俺だ！」でいきましょう。

(昭和32年 湘南高卒)

2. 6 サッカーに魅せられ40年

平成12年シニアチーム五十雀リーグ監督 福 井 民 雄

湘南高校で始めたサッカー、大学から社会人39歳まで続けたあと、40歳と同時にベガスに参加して15年経った。ベガスチームがあるおかげで、好きなサッカーを今でもプレーできることが幸せだ。

私のサッカー人生ちょうど40年、よき思い出が沢山あり、サッカー仲間との絆は、何物にも替えがたい。

湘南高校時代は、鈴木中先生より基本技術から高度な戦術までご指導いただけたおかげで、関東大会優勝や全国選手権出場を経験してサッカーのおもしろさを知った。当時の仲間との付き合いがずっと続いており、鈴木先生を囲んでの集まりはいつも楽しい。

慶應大学サッカー部時代、関東大学リーグには釜本・森などの日本代表やユース代表が多数おり、自分の技量では通用する自信はなかったが、幸運にも1年のリーグ第1戦から起用され、4年まで全試合出場することができた。特に4年で主将として全日本大学選手権優勝の栄冠を手にし、大学チャンピオンになった時の感激は忘れられない。

昨年から関東大学サッカー連盟理事を務め、最近の大学サッカー界の様子を知る機会が増えた。大学サッカーはJリーグ人気や高校サッカーの隆盛に比べてマイナーな存在になっているが、昨年10月発表された川淵キャプテンズ・ミッションに沿った大学サッカー活性化策が次々と打ち出されており、今後大学サッカーがレベルアップし発展するのを期待したい。

最近の悔しい思い出として、昨年ベガスが全国シニア大会出場を逃したのは残念で仕方ない。あの試合のベガ

サスはワールドカップの日本対トルコ戦の日本のようであった。相手を甘く見て、心は先の本大会に行ってしまう、集中力がないまま点を入れられて、試合が終わってしまった。あらためて試合に臨む気持ちの大事さを痛感した。

今年のベガサスは神奈川五十雀リーグ優勝だけでなく、全国大会に出場して日本一のベガサスになりたい。

(昭和41年 湘南高卒)

2. 7 監督の記

平成12年～13年途中

シニアチーム四十雀リーグ監督 阿 部 裕

一昨年(平成13年 2001年)の9月から2年間の予定でインドへ赴任となり、わずかの期間で監督を次の方に引き継いでいただきましたが、そのわずかな期間監督をやらせていただいて私が一番悩んだことは、やる以上は勝ちたいけれど、来た人全員に出場してもらえるようにすることも監督の務めだと言うことでした。

やはりどのレベルのチームにもその時のベストメンバーと言うものがあります。ただ私達の年代・レベルですと、相手チームに対する戦術の違いによってそれが変わるとかはあまりなくて、勝とうとすれば、どうしても動ける人、動けなくてもキープ出来る人、動けなくても人を上手く使える人が、優先となってしまいます。そこで相手が我々より明らかに弱い場合は、それほど悩まずに上記に該当しない人でも前後半に振り分けて起用出来ますが、それ以外の場合は、どうしてもまずは上記に該当する人優先の先発となり、その後の形勢・勝敗の行方をにらみながら全員を使っていくと言った形となります。その場合、我々のチームが試合を優位に進めていけば良いのですが、逆の場合は半分勝敗を諦めて交代させるか、どのポジションならば交代させても影響が少ないかを、試合の流れを冷静に見極めながら判断する必要が有ります。これを、時には試合開始直前まで参加メンバーが分からない、まして苦戦中の試合に自分も出場しているとすると、判断に必要な残り時間も正確には分からないしで、きっちりやるのは困難なことです。こんなことで、人数が足りないとチームとしては大変ですが、個人的には余計な心配をせずに思い切って試合が出来るのでホッとしたり、人数が多い時は、出たい気持ちをぐっと抑えてまず自分が外れることを考えたり、また試合開始前にウォーミングアップする余裕がなく、それが原因で肉離れ等の怪我が増えたりもしたような気がします。でもいずれにしてもサッカーが出来ると言うことは本当に幸せなことです。

こちらでは、つい先日南アでのワールドカップでも準優勝しましたが、クリケットが盛んで、サッカーをやっているところ(ゴールも)はほとんど見かけないし、テレビで見るのと家の中で壁に向かってボールを蹴るくらい。唯一良い点は、元イギリス領だったこともあり、テレビでプレミア・リーグのいい試合はほとんど放映されており、特にアンリ、ピレス、ピエラ等フランス代表が5人もいるアーセナル、ベロン、ファンニステルローイと 勿論ベッカムもいるマンチェスター・ユナイテッドの、昔のイングランド・サッカーとちょっと違うサッカーを楽しんでいます。やはりこの2チームが他チームと違うのは、第3者の動きの質の高さと、そこに正確なパスを出せる選手の差と、これを基本としたパターンをいかに多く持っているかだつくづく感じます。我々も頑張らしましょう！

(昭和42年 湘南高卒業)

2. 8 湘南ベガサスチームと出逢って

平成13年秋～現在

シニアチーム四十雀リーグ監督 北 原 章

25周年記念誌を発行するに当たって、歴代監督の回想という題名での寄稿依頼がありましたが、私としては現在監督任期途中のために回想と言えるような内容の文章が書けません。したがって、私が湘南ベガサスに入部したいきさつから現在のチーム状況について少々書かせて頂きます。

私が湘南ベガサスサッカークラブに入部させて頂いたのは、平成2年からであります。

私は、皆さんと違って湘南高校のOBではありませんので、当時私が勤めておりました会社のサッカー部の先輩に40歳になったら四十雀チームに入りたい旨を相談したところ、湘南ベガサスを紹介されそのまま入部すること

になりました。

ペガサス入部当時はまだ神奈川県リーグ〈2部〉で現役を続けておりましたので、四十雀のチームならば比較的楽な試合ができるのではないかと多寡をくくっておりましたが、パワフルであったことが印象に残っております。

ペガサス入部当時は、現在のジュニアチームで県の一部リーグでやらせていただきました。ジュニアチームでは3位が最高の順位で、平成10年までの間に優勝できなかったことがやや心残りでありましたが、年齢には勝てず平成11年のシーズンよりシニアチームへ移籍することになりました。

シニアチームでは、移籍した最初の年および昨年と五十雀リーグで2度の優勝を経験させていただき、さらには全国シニア大会の神奈川県予選を勝ち抜き、関東大会まで行けたことについて、非常に感謝しております。今後もさらに優勝回数を増やし、全国大会本大会を目指して、まだまだがんばるつもりであります。

さて監督としての回想ですが、前述しましたとおり現在まだ任期途中であるため回想といえるものはありませんが、そもそも私が監督になったいきさつについて若干述べてさせていただきます。

私が監督となったのは、平成13年のシーズンの途中であります。それまで監督であった阿部氏が会社の命令で海外勤務となり、そこで阿部氏が帰国するまでの間、監督を任されることになりました。

監督としての仕事は、試合のメンバーを決めることが主ですが、これがまた大変な仕事です。なぜならば、試合毎に来るメンバーの数が大きく変動することです。とくに20名以上来られると全員出場してもらうためにどのように交代して行くか、試合どころではありません。またそれとは逆に人数がぎりぎりのときもあり、そのような時はみんなバテバテでも交代するメンバーがいないためかなり苦しい試合をしたことも、特に、前日〈土曜日〉に五十雀の試合があると極端にメンバーが少なくなりました。

チームの状況としては、昨年（平成14年）は、メンバーの皆さんのガンバリによって3部リーグではありますが、なぜか4勝（2グループ化で8試合 1分3敗 相手は40代）もできました。当初はせいぜい2勝程度が良いところであろうと思っておりましたが、やはり試合となると負けたくないと言う闘争本能のようなものが目覚めてか、実力以上の結果となった感じが致しました。しかし所詮は五十雀のメンバーでやっているため、対戦相手との平均年齢差が10歳以上あり、この差は大きく今後も同様の結果を得ることは困難であろうと思われます。従って今年（平成15年）昨年ほど勝つことはできないでしょうが、それでも最低で2～3勝はしたいと思います。

今後については、現在の四十雀リーグにいつまで参加できるのか不明な点がありますが、従来同様全員参加の楽しいサッカーの試合をやって行きたいと思えます。但し、試合後のビールがうまく飲めるようある程度満足の行く試合（勝てそうな相手には絶対に勝つ）をしてゆきたいと考えております。

最後に、湘南ペガサスサッカークラブのさらなる繁栄とメンバー皆様のますますの発展とご健勝を祈念して、結びとさせていただきます。
(昭和40年 県立川崎工高卒)

2. 9 シニアチームの現在監督として

平成14年～現在

シニアチーム五十雀リーグ監督 牧 村 英 樹

ペガサスが発足して25年を迎え、記念すべきこの年にシニアチームの監督として在籍していること、クラブ発足時に関わった一人として感無量の思いです。25年という歳月はいつのまに発足当時35歳だった私も今年は60歳！隔世の感の思いです。一方では、ペガサスを発足時から今日のクラブにまで育て上げるのに、大変ご苦労下さった功労者のお一人である大内さんが志半ばで亡くなられ、この25年の記念すべき節目にご一緒でき得ない事はとても残念であります。

「ジュニア」から「シニア」チームへ、「シニア」から「60代」チームへと年齢の積み重ねに合わせ、スムーズに移行しながらサッカーを続けて行くことの出来る態勢がクラブの中に醸成され、今思えば本当にペガサスというクラブが創られてよかったなあ～と感じています。身体が動く限りサッカーと触れ合え楽しめる場が確保でき、肉体の衰えという現実と常にそれを認めたくないという気持ちとの葛藤の中、しっかりと現実を自覚させてくれるこのペガサスでの活動は他では得られない大事な場だと思います。ペガサス60のチームを形作って頂いた中原さんに

は特に感謝申し上げるところです。いずれにしても、25年の長い歳月の中で節目節目でクラブの存続・発展の為に活躍下さった皆様のご努力の結晶が無事今日を迎える事が出来た最大の理由である事は周知の通りでありましょう。

さて、平成14年度から監督をさせて頂き2年度目を迎えたところであります。なんとと言っても昨年は「県シニア郡市リーグ」を負け無しで優勝することができ、最終戦終了後、みんなで勝利の雄叫びを挙げた後の胴上げは監督冥利につきるものでした。選手の起用法に不満のある人が胴上げの途中で手を離すんじゃないかと心配もしましたが、無事着地させてもらった時には、そんなにうらまれてもいなかったのかと一安心したものでした。

更にベガスシニアとして、その歴史に記されるべきと言うと多少オーバーかとは思いますが、「第一回全国シニアサッカー大会」に選抜チームを破っての初代神奈川県代表として関東大会に出場した事は特筆すべき事だと思います。Wカップ時カメルーンが合宿し使用したすばらしい芝のグラウンド、前の晩学生時代を思い起こすような焼肉屋での盛り上がり、そして茨城県代表に勝ち、残念ながら千葉代表に負け今一步で全国大会に行けなかったものの、これら悲喜こもごもの思い出は参加した一人一人にとって一生忘れ得ぬものとなった事でしょう。この結果、私達のクラブチームはいよいよその活躍の場を県外にまで広げる事になったと言えます。

さて、このように14年度みんなでがんばった結果、今年15年度は追われる立場となり厳しい戦いが予想されます。年末の総会時に気持ち良く後任者に監督を引き継げるようみんなの力を借りて前年同様の成績を上げ記念すべき25年の節目の年を飾るべくがんばりたいと思います。

(昭和37年 湘南高卒)

3. 湘 南 ベ ガ サ ス 6 0

3. 1 平成12～13年度の活動

ベガス60監督 中 原 弘 巳

旧制中学選抜大会その他を通して、古くから湘南OBの方々60歳を超えてもサッカーのプレイをされて来られました。刈谷の大会は平成6年の第1回から、Jヴィレッジは平成10年のプレ大会から続けて参加しています。湘南先輩のこのような活動が、今や高年齢層のサッカーとして一般に広まっています。ベガスシニアの60歳以上のメンバーもこの湘南OBチームに加わって刈谷やJヴィレッジの大会に参加して来ました。平成12年からはチームはベガス主体となり、川島先輩のベガス加入も得て、湘南OBチームの歴史と実績をベガス60が引き継いでいます。平成13年度はさらに菅平の大会に参加しました。従来60歳以上のメンバーはベガスシニア「40」あるいは「50」の試合に加わりながら、「60」の試合をときたま行かうかたちでしたが、平成13年度は「60」の試合が増加し、ベガス60活動を附属的なものから、独立したものへと拡大しようとした年でした。

このような60代サッカーの発展に、湘南OBからベガスへと、湘南チームは最初から参画して来たわけですが、中学/高校OB主体のチームは他に見られないユニークなものです。

さらに、平成13年には初めての海外遠征をベガスの「50」+「60」主体で行いました。

(1) 平成12年度の活動

Jヴィレッジの大会が平成12年度から日本サッカー協会が主催する全国シニア(60歳以上)大会に発展しました。札幌から熊本までの日本全国から22チームが参加しました。やや窮屈な面もありますが、整備された芝生のピッチの上できっちりした試合の運営の中、緊張感のあるゲームを楽しむことが出来ました。3日間で5試合の強行日程でしたが、22名のフルメンバーの参加で、負けなしの好成績でした。初日から参加した方々の緒戦での頑張りがチームの勢いを作り、最終戦で強豪埼玉県を見事に破りました。

9月開催の刈谷スーパーエイジ大会は形式にとらわれない自由にサッカーを楽しむ大会として、平成12年度で第7回と実績を重ねて来ました。3戦全勝でしたが、特に関学中央には動きの早さで圧倒し完勝しました。

60歳以上のねんりんびっく大会が大阪で行われましたが、酒井さんが纏められた神奈川県選抜チームに多くのベガスメンバーが参加しています。

(2) 平成13年度全国大会

毎年参加のJヴィレッジ全国シニア(60歳以上)大会(5月)、刈谷スーパーエイジ大会(11月)に加えて、菅平ダイヤモンドエイジ大会(6月)に参加しました。いずれも良好な芝生のグラウンド、周囲の素晴らしい環境でのサッカーを楽しみました。7勝4敗1分けの戦績でした。

(3) 平成13年海外遠征

湘南ペガサスとしては初めての試みですが、60代を中心とし50代の参加も得て、海外遠征を行いました(8月30日～9月7日)。行き先はオーストラリア・ゴールドコーストです。ここにはオーバー35のサッカーリーグ連盟があり、良い気候の下で年間を通して試合をしています。このリーグから50、60代の選手を選出して作った2チームと対戦しました。聞いてみると、いずれもかつて若い時に欧州で活躍していた人たちで、流石に強く、完敗でした。しかし、グラウンド脇での名物のバーベキューとともに、本場のサッカーらしいものを楽しむことが出来ました。彼らは芝生の専用グラウンドで毎週1～2回のナイトゲームを、休日を使うことなく、仕事が終わってから行っており、サッカーが日常生活の中に組み込まれているようでした。日本代表チームの成長とは別に、一般レベルでのサッカー環境の違いを改めて感じました。

(4) 平成13年 県内の試合

県内の60歳代チームとの交流練習試合を3回行いました。

(昭和30年 湘南高卒)

3. 2 平成14年度の活動

ペガサス60監督 中原 弘 巳

敬老の日の前日にテレビ東京の全国ネットで「湘南ペガサス60」の試合振りが紹介され、塩川さんの見事なロングシュートが映し出されました。番組のコメンテーターは予想外の動きの早いサッカーに感心していました。最近の元気なお年寄りの活動の一つとしての紹介ですが、年配者のサッカーが生涯スポーツとして盛んになって来ていることが認められ、その代表例としてペガサス60チームに声がかかったものと思います。

60代の大会が最近では増加しており、この年代の試合のみでも年間を通してサッカーが楽しめるようになって来ています。特に県外での試合が多く、各地の新しいチームと対戦出来る楽しみがあります。多くの試合が芝生のピッチで行われることも嬉しいことです。県内では今年から試験的に4チームで六十雀リーグを始めています。5勝1分けでした。県外では古河の大会に新しく六十雀部門が設けられ、3チームの参加でしたがペガサスが優勝しました。感動&健康リーグ(Gリーグ)に今年から参加しています。これは勝敗よりも健康増進と交流を深めるためのもので、関東と清水の8チームで各地で交流会を行っています。7月にはワールドカップ公式練習場用に使用した素晴らしい芝生の保土ヶ谷サッカー場に東京、清水を迎えました。皆さんワールドカップの興奮を思い出しながらのプレイだったと思います。従来からの、全国シニア(Jヴィレッジ)、菅平、刈谷の大会には引き続き参加しました。

戦績を纏めると17勝11敗4分けの合計32試合でした。

第15回全国健康福祉祭ふくしま大会(うつくしまねりんピック2002)にペガサス中心のメンバーで参加しました。ねりんピックのチームは県協会が選抜しますが、ペガサスの実績によりペガサス主体のチーム作りが可能になっています。

今年平成15年4月に桑田先輩に誘われて何人かの湘南OBの方々とSOI英国遠征に参加しました。その時の対戦相手ブラット氏は、かつてオックスフォード/ケンブリッジ合同チームの一員として、ウェンブレイ10万観衆の前でF.A.アマチュア選手権に優勝したそうです。その名門チームの名前が「ペガサス」だったとのこと。日本のブラザー ペガサスの存在を喜んでくれました。ペガサスはサッカーチームとしてなかなか由緒ある名前ということになります。ご紹介まで。

(昭和30年 湘南高卒)

編者注：ゲームの結果は戦績として巻末「資料」に収録してあります

湘南ペガサスシニアチームの渉外担当として

シニアチーム 山 本 修

15周年記念誌と一部重複しますが、シニアチーム発足以降の経過概要を、渉外担当の立場から回想して寄稿とします。

1. 湘南ペガサスシニアチーム発足

湘南ペガサスクラブ設立後10年以上経過すると、発足当時のメンバーの多くが50才以上となり、毎年40才の新人が加入して四十雀リーグ1部の公式戦に出場するのは40才代の若手メンバーが中心となり、50才以上のシニアメンバーは年数回の親善交流試合に参加するだけという状況になってきた。

12年目の平成元年（1989）からは、横浜サッカー協会主催のマスターズOB大会に参加し、年に1回ではあるが、50才以上のメンバーでの試合機会が確保されるようになった。

14年目の平成3年（1991）年度には、クラブ内の世代交代も十分に進んだことから、発足当時の年代層の湘南OBおよびその友人の協力参加も加えて、50才以上メンバーの湘南ペガサスシニアチームが編成され、四十雀リーグ1部所属の湘南ペガサスチームから分離独立して、この年の第8回四十雀リーグの2部に加盟した。

この年度に、私は新編成の湘南ペガサスシニアチームの渉外を担当した。

2. 四十雀リーグ2部・3部

シニアチームが加入した平成3年度第8回の四十雀リーグは1部・2部各11チームの構成であったが、新規参加チームが年々増えて、平成7年度第12回は1部13チーム・2部14チームの計27チーム、平成8年度（1996）第13回には30チームになって、1部・2部・3部各10チームの3部制に再編成され、それ以来湘南ペガサスシニアは3部に所属している。

参加資格40才以上の四十雀リーグの中では、50才以上の我が湘南ペガサスシニアチームは高年令で、平均年令が10年若いチームを相手に常に苦戦の連続で、2部でも3部になっても、毎年必死争いをしている。神奈川四十雀Aチームと初期の川崎四十雀Aチームとは、湘南ペガサスシニアチームと同様に、50才以上で構成されているので、同年配で対戦できる数少ない相手であった。

10年ほど前までは、子供サッカークラブの手伝いをしている父親たちが主体のチームが、四十雀リーグのなかに2～3チームは所属していた。子供クラブの世話をしながら、我々もやろうといって中年でサッカーを始めたメンバーが多数のこのような父親主体チームに対し、湘南ペガサスシニアチームは、40才代の走力とスピードには負けていても、球扱いの技量と戦術眼の優位性を生かして対抗し、勝負は互角の好敵手であった。これらの父親主体チームも世代交代が進むと、走力と技術を兼ね備えた強力チームに成長して、以前のような好敵手は少なくなってしまうようである。

50才以上の湘南ペガサスシニアが、同年配の対戦相手が少ない時代に、やむを得ず四十雀リーグ2部・3部に加入したもので、五十雀リーグが本格的に運営されるようになると、四十雀リーグからは撤退することも議論されるようになったが、とりあえず、平成15年度第20回四十雀リーグにはこれまで通り参加することになっている。

3. 五十雀リーグ

四十雀リーグ所属のどのチームも、湘南ペガサスクラブと同様に、四十雀リーグ発足当時のメンバーの多くが50才以上となり、試合出場機会が少くなっている状況から、五十雀リーグを目標に、50才以上チームの交流試合を各チームに呼びかけ、平成4年度（1992）には当クラブの井上孝氏が世話役になって、東海大学グラウンドを借りて5チーム参加のワンデイ五十雀交流試合を開催し、平成5年度、平成6年度は6チーム参加で五十雀プレリーグが実施され、湘南ペガサスシニアチームも参加した。

平成7年度、8年度はこの活動がスローダウンしていたが、ようやく準備が進んで平成8年11月の四十雀リーグ代表者会議において県協会事務局から五十雀リーグの来年度発足がアナウンスされ、湘南ペガサスシニアを含む8チームの参加により、平成9年度（1997）第1回五十雀リーグがスタートした。その後加入チームが増加して、平成14年度（2002）第6回五十雀リーグには12チーム、今年平成15年度第7回には14チーム

が参加している。

同年配と対戦する五十雀リーグでは、湘南ベガサスシニアは毎年優勝争いに加わっており、平成11年度第3回と14年度第6回の2回の優勝、準優勝1回、3位3回の成績である。

4. 湘南ベガサスシニアチームのその他の試合

(1) 県議長杯五十雀トーナメント

四十雀リーグと並んで四十雀トーナメントは以前から開催されているが、五十雀リーグの参加チーム増加に対応して、県議長杯五十雀トーナメントが平成13年度第1回、14年度第2回と開催され、湘南ベガサスシニアチームもこれに参加している。

(2) 古河市マスターズ大会50才以上エンジョイ部門

古河市マスターズ大会は40才以上を参加資格に平成3年度(1991)から実施されているが、平成7年度の第5回に50才以上エンジョイ部門が新設された機会に、なるべく同年配同士の試合機会を増やしたいと考えて、湘南ベガサスシニアも参加し、以後毎年1泊2日の交流試合を楽しんでいる。

(3) 全国シニア大会

平成14年度第1回の全国シニア大会が、日本サッカー協会主催、50才以上が参加資格で、県別予選、地域別予選の後、全国大会という方式で開催された。湘南ベガサスシニアは、神奈川県予選で五十雀リーグ選抜チームに勝って関東大会に出場し、1回戦茨城代表に勝ったが、代表決定戦で千葉代表に敗退し、全国大会には出場できなかった。

5. 60才以上の「湘南ベガサス60」チーム

湘南ベガサスクラブ設立後20年以上経過すると、発足当時のメンバーの多くが60才以上となり、ベガサスシニアチームに毎年50才の新人が加入して、五十雀リーグの公式戦に出場するのは50才代の若手を中心となり、60才以上のメンバーは、別途以下のような60才以上の試合に主として参加するようになった。

このような試合行事はクラブ運営とは別扱いとして運営されていたが、ベガサスシニアの60才以上メンバーの増加に対応して、60才以上対象のこれらの試合をクラブの行事として認定することとなり、平成12年度(2000)から60才以上メンバーの湘南ベガサス60チームの活動が開始されることとなった。

これにより、我が湘南ベガサスクラブには、40才以上、50才以上、60才以上の各年代別チームが編成され、それぞれ年代に応じて活動できる体制が整備された。

(1) 刈谷スーパーエイジ大会

参加資格60才以上の刈谷スーパーエイジ大会には、湘南サッカー部超OBと60才以上の湘南ベガサスシニアのメンバーとの混成チームを編成して、湘南OBサッカークラブの名称で、平成6年度(1994)第1回から参加した。

ベガサスシニアのメンバーが、毎年60才となるとこのチームに加入して、年々増加し、平成10年度の第5回から実質的にベガサスシニアの60才以上メンバーで構成されるようになり、平成12年度第7回からは、上記ベガサス60チームの公認に対応して、湘南ベガサスクラブの名称で参加している。

(2) 福島Jビレッジの全国シニア大会

福島Jビレッジを会場に、参加資格60才以上の全国シニア大会が企画され、平成10年度(1998)プレ大会、11年度第1回から公式にサッカー協会主催により開催されるようになった。上記の刈谷と同様に、湘南OBクラブ・湘南ベガサスクラブとして、平成10年度プレ大会から14年度第4回まで毎年参加している。

(3) 菅平ダイヤモンドエイジ大会

菅平高原の旅館組合が、ラグビー用に整備した芝生のグラウンドを提供して、参加資格60才以上のサッカー交流会を開催している大会で、平成13年度(2001)第1回、14年度第2回と、湘南ベガサス60チームが参加した。

(4) 六十雀リーグ

神奈川県四十雀リーグが間もなく20周年を迎えることから、参加資格60才以上の六十雀リーグの準備が進められ、平成14年度(2002)プレリーグとして、湘南ベガサス60を含む4チーム参加、2回総当たりのリーグ戦が実施された。

平成15年度には、5チーム参加の第1回六十雀リーグがスタートの予定である。

(5) 古河マスターズ大会60才以上エンジョイ部門

平成14年度(2002)第12回の古河マスターズ大会に、60才以上エンジョイ部門が新設され、湘南ベガサス60チームが出場し、3チーム参加の第1回大会に2勝して優勝した。

(6) Gリーグ

東京、千葉、茨城、埼玉、栃木、神奈川、などの関東各県と清水市の60才以上チームが集まって、良いグラウンドが確保できた機会に、お互いに誘い合ってサッカーを楽しむ交流会が、感動と健康のGリーグと称して、02年度から開催されるようになった。

湘南ベガサス60は、昨 平成14年度には、千葉県都賀、習志野、埼玉県深谷、清水ヘビジターとして参加したほか、昨年7月には、湘南ベガサス60が主催して、ワールドカップの公式練習会場として芝生が整備された保土ヶ谷サッカー場を会場に、東京と清水を招待した。

6. 東海大四之宮グラウンド

神奈川県のシニア年令リーグは、昨 平成14年度第19回四十雀リーグ;1部・2部・3部A・3部Bの編成で計43チーム、第6回五十雀リーグ;12チームが参加する盛況で、更に年々増加している。

この四十雀リーグ・五十雀リーグ実施の最大の問題点は試合会場のグラウンド確保である。

このためには、参加チームが年に1回グラウンドを確保することが原則で、このグラウンドの順次持ち回りにより一日5~6試合を消化して10~12チームの総当たりリーグ戦が成立する。年々増加する新規加入チームには、この原則が厳しく適用されて、年1回のグラウンド確保が新規加入の資格要件とされている。

我が湘南ベガサスは、ジュニアチーム・シニアチームの2チームが参加しながら、ホームグラウンドとして確保提供できるグラウンドが無いので、グラウンド確保は他チームに依存している。四十雀リーグスタート以来の古参メンバーとして大目に見てもらっているが、いつも肩身の狭い思いを続けてきた。

平成4年度(1992)第9回四十雀リーグから、井上孝氏の紹介で、東海大学四之宮グラウンドが借りられるようになり、平成10年度第15回四十雀リーグまでの7年間は湘南ベガサスの提供グラウンドとして使わせてもらった。相模川河川敷のこのグラウンドは、雑草が生えていて、必ずしも良いグラウンドとは言えないが、この期間は、通常の割り当て以上に多くの回数のグラウンドを提供して、長年の借りを返すことができた。

残念ながら、平成11年にこのグラウンドは閉鎖になり、我が湘南ベガサスはグラウンドを提供できないチームに逆戻りしている。

7. リーグ幹事

平成7年度(1995)には、湘南ベガサスシニアチームの渉外担当を、私が再度引き受けることになった。この年は、第12回四十雀リーグの2部の持ち回り当番の年に当たり、湘南ベガサスシニアチームが主幹事、座間四十雀チームが副幹事として、リーグ運営の大役を受け持つこととなった。年間の仕事量も多いことから、この年は、渉外主担当の私と副担当の井上孝氏との2人でこの仕事を担当した。

この年も新加入2チームが増えて、四十雀リーグ2部は14チームの編成となった。前年の2部12チーム総当たりのリーグ戦でも、1日6試合×11日=計66試合が必要で、グラウンド確保の困難や、更に雨天順延などが起きて、毎年幹事チームは11月ないし12月までに日程を完了させるのに苦労していた。

14チームの総当たりリーグ戦では91試合の日程消化が必要で、例年通りのやり方では、4月開始、11月完了の目標の達成はまず不可能と予想された。そこで、リーグ戦による順位決定の基本線は維持しながら年間試合数を削減できるように、つぎのような2段階リーグ戦方式を創案した。

2段階リーグ戦方式

計67試合

第1次リーグ Aブロック Bブロック 各7チーム独立にリーグ戦 42試合

第2次リーグ 上位リーグ 上位各4チーム計8チームのリーグ戦 16試合

下位リーグ 下位各3チーム計6チームのリーグ戦 9試合

(1次リーグで対戦した試合は再戦せず、1次リーグの結果を適用)

これにより、リーグ戦として1位から14位までの順位は決定されながら、総当たりによって24試合が削減され、前年の12チーム総当たりの試合数66試合と同程度になる。しかも、上位同士・下位同士の対戦試合は確保され、削減されるのは上位対下位の対戦であり、リーグ戦として望ましい特徴が維持されて、実害は少ないと期待される。

共同幹事の座間四十雀チームとも相談して、リーグ戦開幕準備の四十雀リーグ運営委員会に対し、この2段階リーグ戦方式を提案した。ところが、リーグ運営委員の主要メンバーからは、例年通りの総当たりリーグ戦で実施すべきであると、反対意見が出され、この案はボツになりそうになった。

運営委員の一人から、「まずこの2段階リーグ戦方式でスタートし、第2次リーグが終わった時点で、日程に余裕があれば総当たりの残り試合を実施し、日程に余裕が無ければそこで打ち切りとすれば良い」との助け船が出され、この妥協案が採用された。

実施結果は予想通りの苦しい日程であり、第2次リーグが12月までズレ込んで、第2次リーグ終了をもって打ち切り、結果として2段階リーグ戦方式の実施となった。

リーグ運営の幹事チームとして一番の懸念事項は、例年通りグラウンド確保であったが、上記6項の東海大四之宮グラウンドを使用させてもらえたことで、大いに助けられた。

8. 渉外担当として

湘南ベガサスシニアより5年早く、神奈川四十雀クラブでは50歳以上の神奈川四十雀Aチームを編成して、昭和61年度(1986)第3回四十雀リーグから2部に加入していた。

私の場合、前年昭和60年度第2回四十雀リーグまでは湘南ベガサスのメンバーとして出場したが、翌年の第3回四十雀リーグから選手登録を2部新加入の神奈川四十雀Aチームへ移籍し、平成2年度(1990)第7回四十雀リーグまで5年間、神奈川四十雀Aチームでは監督兼渉外担当兼選手として出場した。

50歳以上メンバーにより湘南ベガサスシニアチームが新編成されて、平成3年度第8回四十雀リーグの2部に加入した機会に、私も選手登録を移して湘南ベガサスシニアに復帰した。神奈川四十雀Aで渉外を担当していた経験が買われて、この平成3年度に、湘南ベガサスシニアの渉外を、私が担当することになった。

次の年も渉外担当を継続のつもりであったが、たまたま家内が脳腫瘍で手術、長期入院ということになり、平成4年度の渉外担当を井上孝氏に引き継いでもらった。

家内の脳腫瘍手術後の経過不良、1年10ヶ月の長期入院の後亡くなるまで病院通いに忙しく、足掛け3年間はクラブの役職を免除させてもらったが、平成7年度(1995)には、湘南ベガサスシニアチームの渉外担当を、私が再度引き受けることになった。この年度は、前記7項のように、第12回四十雀リーグ2部14チームのリーグ幹事の大役のほか、古河マスターズ50才以上の部に初参加した年であった。

湘南ベガサスシニアの渉外担当に加えて、リーグ運営委員にもアサインされ、四十雀リーグ全体の企画運営の審議に参画した。翌年平成8年度は第13回四十雀リーグの3部制への再編成の年、次の9年度は第14回四十雀リーグ3部と並行して第1回五十雀リーグ開始の年で、平成7年度～9年度の多事多難の3年間、クラブの渉外担当とリーグ運営委員を続けた。平成8年度(1996)には湘南ベガサスシニアチームの監督も兼任した。

平成10年度は、痴呆症の老母の介護のため1年10ヶ月の予定で母の住居の世田谷区へ転居し、夜間・休日の外出の自由度が制約される事態となり、やむを得ず渉外担当を辞退して、渉外担当とリーグ運営委員を渡嶋九州夫氏に引き継いでもらった。

9. おわりに

今回の25周年記念誌は、前回の15周年記念誌から後の10年間の対象であるが、シニアチーム発足以降の12年間の経過概要を回想して、寄稿としました。

この時期は、私にとっては、家内の入院手術以来の約11年間一人暮らしを続けた時期と重なります。

一人暮らしによるストレスに加えて、家内の看病から死亡の後処理、ボケの老母の介護分担が重なって、ストレスの多い11年でした。これまで何とか健康で過ごすことが出来たのは、皆さんと一緒にサッカーをやることができ、皆さんから励ましていただいたお蔭と感謝しています。

シニア年令のサッカーが益々盛んになって、県内では四十雀リーグ・五十雀リーグ・六十雀リーグと年代別の試合機会も増え、我が湘南ベガサスクラブも40才以上、50才以上、60才以上の年代別チーム編成が整備されていますが、私の場合、

四十雀リーグ発足第1回の 昭和59年(1984)、私は51才、

五十雀リーグ発足第1回の 平成9年(1997)、私は64才、

六十雀リーグ発足第1回今年平成15年(2003)、私は70才 という経過で、

どの時代も少し早く年を取りすぎて、20年間若い選手相手に苦戦を続けてきました。

10年後には、七十雀リーグ発足を80才で迎えることを目標に、これからも励みたいと願っています。

(昭和27年 湘南高卒業)

シニアリーグとの関わり

(審判活動を通して見たシニアサッカー)

シニアチーム 渡 嶋 九 洲 夫

だいぶ古い話からになるが、シニアリーグとの関わりの前に、私とサッカーとの出会いから紹介しましょう。

昭和24年(1949年)鎌倉第2小学校6年生のときのこと、鎌倉師範(現横浜国大)から教生としてこられた一人の実習生と出会いサッカーを教えて貰ったのが、私のサッカー人生の始まりである。以来54年間サッカーと付き合っている。

鎌倉学園中学校時代は、ベガサスシニアの伊藤貞夫氏と県大会等と一緒にプレーしてきました。その後、湘南高校を卒業した後、フェニックスというチーム(卒業同期の11人プラス何人かの湘南卒業生で編成したチーム)でプレーし、昭和37年(1962)(株)山武(当時は山武計器株)に入社、2年後にサッカー部を作って、プレーする傍ら、審判を同時にやってきました。山武における現役を卒業し、ベガサスに入団を申請したところ、故人の大内氏から、これまた故人の松浦大先輩から藤沢四十雀から指名があったということで藤沢四十雀に参加することになりました。ベガサスに移籍したのはそれほど昔ではない。

審判活動としては、鎌倉学園の先輩手塚健一氏(後の国際審判員)の指導を受け2級審判になることが出来、山武のチームが関東リーグに所属していた頃は専ら審判員として、関東大学リーグ・旧日本リーグ・関東社会人サッカーリーグの審判員に専念してきました。

審判で一番大切なことは競技規則を正しく適用することですが、1~17条ある競技規則の他にもう一つ『18条』を適用することが重要、かつ大切と教えられ、自分でもそのとおり実行しています。

このことを念頭に、一般常識(コモンセンス)に属する部分を、そしてシニアリーグでは特に、選手の体力の衰え、反射神経の後退を考慮して、判定を前倒しにするように心がけています。

ある年度末の納会で、シニアリーグのある人から、この人(私のこと)は神奈川シニアリーグでもっとも厳しい審判だということを酔った席で指摘されたことがあります。しかし選手皆さんの体力・身体能力を考えたとき私は間違っていないと確信しています。

会員諸氏のプレーにおいて、この辺りについての理解と自覚が深まる事を期待しています。

(長くシニアチーム渉外を担当 審判員としても奉仕 昭和30年 湘南高卒業)

【筆 者 注】

18条について:

1~17条を、試合の中で適用するにあたって、選手の年齢層に見合った適用の仕方をするのが大切です。

小学生・中学生のチームに対しては教育的な立場での適用の仕方、高校生以上シニアになる前の一般チームの試

合に対しては厳正（激しいプレーと汚いプレーを見極めて）速い展開のあるゲームに対応すること、シニア以上のチームのときはケガの直りが遅くなることと、体力の衰えと反射神経の後退を考慮してレイトタックルの防止やシヨルダーチャージなどの程度を考慮した対応が必要です。

判定の前倒しについて：

シニアの試合では、18条の項でも触れたとおり、体力の衰えと反射神経の後退によって、その選手が意図していないであろう反則が目立つようになります。試合開始の早い段階で、そんなプレーをすると反則として『笛を吹くよ』ということを、選手に理解してもらう必要があります。軽い反則であったとしても、若いときはアドバンテージを採用してプレーを続行させた方が良いケースでも、シニアの試合では、反則を受けた選手の体力を考慮して、他のカテゴリー以上に厳しく競技規則を適用することが大切と考えて実行しています。

この目的は、少しでも長く選手生活を続けて欲しいからです。

以上

随 想

1. 雨の日の思い出

シニアチーム 伊 通 元 康

現在加盟をしている四十雀および五十雀リーグでは、基本的に雨天での試合は行わないことになっている。ぼくは中学、高校生のころの雨の日の試合を懐かしく思い出すときがある。

初めての雨降りでの試合は、昭和37年(1962)6月の練習試合であった。そのとき、ぼくは長後中学の三年生で、サッカー部の初代のキャプテンでもあった。創部2ヶ月余りで、まだサイドキックもろくにできない、ただ走り回るだけの少年の集まりであった。

対戦相手は大和の光ヶ丘中学で、同校のグラウンドでの試合となった。開始後まもなく雨が降り始めて、前半が終了するころにはドシャ降り状態であった。たしか先制点を取られていたと記憶をしているが、ぼくはそのうち、身体全体が濡れることがこんなに楽しいものなのか、という思いで戦っていた。雨傘が頬をつたわり口もとに達すると、雨独特の埃のような味がしたことを思い出す。当時のシャツやパンツは、今どきの発汗性のよいハイテクの生地ではなくて、木綿地のものであった。ハーフタイムでの円陣では、誰もが雨と汗を十分吸い込んでだらしなく弛んだシャツ姿で、嬉しそうに話し合っていた。あのときがぼくのサッカーの原点であったような気がする。ただ無邪気にひたすら走ってボールを追い掛け回していたころが。

試合結果は、ぼくが新設チームとして初の得点をあげたが負けてしまった。

昭和40年(1965)7月の水戸における関東大会の1回戦が大雨での試合となった。対戦相手は東京の大泉学園高校であった。ぼくは3年生で、ポジションはストッパーであった。最初から負ける相手とは思っていなかったが、グラウンドコンディションが最悪のなかで、攻めに攻めているが点が入らず、嫌な雰囲気が増えてきた。そのようなとき、後半であったと思うが、相手に強いシュートを打たれた。ヤバイ!と目をつむりかけた瞬間に、ワンバウンドしたボールがゴール前で急にストップをして事なきを得たことがあった。試合はそのまま0:0で終了して、周知のとおりぼくらは抽選勝ちを収めた。あのとき泥だらけの顔から白い歯をのぞかせて、みんながほっとしたように中さんと握手をしまくっていたことを思い出す。

この大会で湘南高校は、決勝戦を帝京高校と戦い1:0で勝利した。

(昭和41年 湘南高卒)

2. 私とサッカーの出会い

ベガサス「60」チーム 伊 藤 貞 夫

昭和24年('49)4月、私は鎌倉学園鎌倉中学校に入学しました。私達の小学校時代は、スポーツと言えば野球しかなく、毎日草野球をしていました。当時は道具と云えるものはなく、ボールは布切れを巻いて作り、バットは木を削って作ったもの、グローブは布で作ったもの、今から見たらよくこんなもので野球が出来たと思われる、ひどいものでした。それでもみな野球を一生懸命やっていました。私も同じ、自分も上手いつもりでいたのですが、中学に入ったら野球部に入ろうと思っていたのですが、入部テストがあり、みな素晴らしい皮のグローブを持って、テストの順番を待っていました。私は親がどうしても買ってくれません。仕方なくテストを見学していました。

そんな私の様子を見て近付いてきた上級生がいました。高校三年の私の兄の友人で、今ベガサス「60」の栗原克夫さんの兄さんです。「半袖シャツと半ズボンがあれば出来るスポーツ」があるがやらないかと誘われた、これが私のサッカーの始まりです。当時、アソシエーション フットボールと言っていました。最初は上記の服装に足はハダシでした。サイドキック、インステップキックを教わったとおりにしました。と言うのはハダシなので、ちょっとはズレただけですごく痛かったからです。

このような具合でサッカーに夢中になって行きました。当時の仲間に、渡嶋九州夫さん、田中啓元さん、茅ヶ崎で蕎麦屋を営んでいる長谷川さんなどがおります。ベガサスには50歳代に入って、10年余り過ぎた現在もベガサス60でやっております。

(昭和30年 鎌倉学園高卒)

3. サッカーつれづれ

シニアチーム 黄 瀬 直 彦

湘南ペガサスサッカークラブ25周年おめでとうございます。

私はこの湘南ペガサスに入れてもらい、サッカーの輪がとても広がり、楽しみも大きくなりました。サッカーを続けていて良かったとつくづく思います。

ところで、私のボール蹴りの経歴は以下のようなものです。(特にたいしたことはありません。)

サッカー(ボールを蹴ること??)との出会いは、中学3年の冬、バレーボールを蹴り始めたときかな。中学(鶴沼中)時代はピンポン部にて、小さいボールを相手に手を振り回していたっけ。(まだ、サッカー部がありませんでした。)高校(茅ヶ崎北陵高)に入って、やっと大きいボールを相手にしたな。よく、ニードルでチューブに穴をあけたな。先輩はきびしかった。(坪井さん??)

大学(東海大)では、札幌で2年間本土の力(??)を見せ付けてやったな。(本当か)

その後の2年間は清水でコテコテにやられたな。社会人になってからは、アンテロープスで暴れまくったな。(転びまくった??)

今、40歳を過ぎ50歳になり湘南ペガサスで楽しんでいます。

アンテロープスの時代には、日曜日は試合か辻堂海浜公園等でボールを蹴っていて、サッカー漬けでした。本場にサッカーの好きな人間の集まりでした。私は日曜日にサッカーのために集まり散っていく「蜘蛛の子チーム」と思っています。(今でも)湘南ペガサスにもアンテロープスの残党がいて、昔のイメージを思い出しながら、プレーしています。

子供(小学生)の指導も楽しいですね。湘南ペガサスの方々の中にも少年少女の指導者も多いと思います。今の子供たちはいいですね。テレビでは世界のレベルの高いゲームを見れるし、子供たちのOBが側でナマのプレーを見せてくれるし。

私は週末になると、楽しくて、楽しくて。小学生相手にボールと戯れ、同世代でボールを追ひ回し、取り合い。これからも、湘南ペガサスでお世話になりますので、宜しく御願いたします。

乱筆乱文にて失礼いたしました。

(昭和46年 茅ヶ崎北陵高卒)

4. 爺(G?)リーグ雑感 — 怪我にまつわる話

シニアチーム 坂 部 治 郎

湘南ペガサスシニアでプレーさせていただいて、2年が過ぎました。

私は昭和58年('83)から17年間にわたりケニアでマカデミアナッツに係る仕事をしておりました。ケニアは、陸上の中長距離選手がつとに有名ですが、サッカーはあまり強くはありません。しかし、世界の多くの国がそうであるように一般大衆には最もポピュラーなスポーツです。

赴任して、最初の数年間は、月に1回ぐらいの頻度でボールをけるチャンスがありましたが、本帰国までの後半の10年以上は、年二、三回がいいところでありました。そのうち一回は、子供が通っていた日本人学校で、子供たちと、そしてもう一回は現在のフットサルに近い形式のミニサッカーで、ワールドカップ(首都ナイロビ駐在の各国駐在員のお遊び)に参加しておりました。

日本に帰れば、四十雀というものが存在しているということを知っておりましたが、本帰国の時には既に齢50を越え、シニアからのスタートとなりました。

サッカーをリーグでやるようになって、自分の体がサッカーから如何に遠ざかっているかということに気が付きました。ケニアにいる頃は、自分の体をいじめるのは、主にテニスとジョギングでしたが、こちらに戻ってサッカーを始めたら、ボールを使い、ボディコンタクトをするスポーツであるサッカーの動きに自分の体がいかにフィットしていないかという悲しい現実に向き合わねばなりません。当然の結果としていくつかの怪我を経験することになりましたが、この2年間で痛めた以下の部位は、私にとって初めてのものばかりです。

- 1) 腰 (オーバーヘッドキックを思わずやってしまい、落ち損なって傷めたもの)
- 2) 右太もも裏、右ふくらはぎ、左膝内側の肉離れ (ろくにストレッチをせず、ボールを蹴った時におきたもの)
- 3) 肋骨 (ひびあるいは骨折、この2年間に3回)
- 4) 踵の炎症、アキレス腱の炎症

自分のサッカーの記憶は30代前半の頃までしかなく、サッカーにおける体の動きの記憶もその頃で止まっていました。従って、リーグで始めたころは、体が昔の動きをしようとする無理を重ねていたようです。その典型が、上記のオーバーヘッドキックにあります。後で皆さんから、そういう無理をして、時々、救急車で運ばれる人があるのよねと言われて、ソッといたしました。その時は何とか、家に戻りましたが、翌日は起き上がれず、会社は欠勤。

次の典型が、アップ不足による筋肉の怪我です。あまり準備体操などは好きではなかったものですから、グラウンドに出ればすぐにボールを蹴り始めるというタイプでした。その結果が、このごまでありました。この何回かの失敗を経験しまして、その後、試合前にボールは蹴らなくとも、ストレッチだけはするようになってから、傷めることが殆ど無くなりました。

三番目の肋骨の骨折またひびは、若いころには全く経験したことがありません。最初のケースは、試合中に傷めたはずなのですが、いつもらったのかも判りません。床の中に入ってもろくに寝返りもできません。痛みがいつになっても引かないのでおかしいなあと思っているうちに別件で医者に行くことがあったので、ついで見ってもらったところ、ドクターからああ折れてましたねという具合でした。しかし、こう何回も痛めるというのは、歳をとって骨がもろくなっているからなのでしょう。

4番目のケースは、浅倉さんのアドバイスによる、踵の下に入れる500円のスポンジと、本屋で立ち読みしたテーピング論のアキレス腱を保護するテーピングで解消しました。これが、一番安上がりでした。

この他に、“通常の”捻挫、打撲などはすでに山盛りいっぱい状態。

楽しいサッカーライフをエンジョイするためには、怪我はしないに越したことはありません。しかしサッカーはやはりそれなりに激しくやらねば面白くありません。従って怪我の可能性とはいっても背中合わせなのはいたしかたありますまい。

この2年間の教訓は、月並みではありますが、まず基本の体調管理、試合前のテーピングとストレッチ、アップはしっかりやる。プレー中に無理をするべきところとそうでないところを嗅ぎ分ける。でもこれが非常に難しい。判れば、ケガなんかしないはずなんです。どなたか、もっと効果的な怪我回避法をご存知の方、お助けください。

(昭和44年 湘南高卒)

5. 25年目の思い

ジュニアチーム 田 中 聡

湘南ベガサス25周年とのことですが、私も湘南高校を卒業してちょうど25年になります。74年西ドイツワールドカップで、ヨハン・クライフのアルゼンチン戦のスーパー・ゴールがサッカーの感動との出会いでした。当時サッカー部のなかった附属鎌倉中3年生だった私は、野球部で6番ショートでしたが、野球部引退後は、サッカーばかりして遊んでいました。湘南高校入学と同時に、同じ中学から上がった友達数人と憧れのサッカー部入部。この友達のうちで一番素質のあった人が、1年の終わりに腎臓病で急逝。現在の職業を選んだのはこの時でした。結局、数人のうち最後まで残ったのは私だけでした。

高校時代は、1つ上は国体選抜の八木先輩、1つ下は湘南を久々の全国大会に導いた藤塚君の学年に挟まれた5

3（ゴミと呼ばれた）回でしたが、今もベガサスと一緒にプレーする新倉君やOB会の要職にある武藤君などのすばらしい同期に恵まれました。高校からサッカーを始めた私は、基本を最初の3ヶ月で徹底的に叩き込まれ、1年の秋には、あたりの強さを買われて雨中の新人戦に出場もさせてもらいました。初心者で、鈍足。懸垂ができなくて体育も”C”だった私は、何とかボールだけでも蹴れるようになろうとして、毎朝横浜から早くきて、今も残る湘南名物のスタンドに向かってひとりで蹴っていました。おかげで止まっているボールは蹴れるようになりましたが、どうしても天性のスピードの無さが克服できず、鈴木中先生には3年間怒鳴られ続けました。鈴木先生は、私の現在までの人生の3大恩師の一人と思っています。

しかし、その後は腰痛や肉離れと戦いながら、3年最後の総体予選まで頑張りましたが、結局、現役最後の試合は出場できませんでした。そして、その試合の相手、横須賀高校には、同じ中学の野球部だった仲間が2人レギュラーで活躍していました。善行の体育センターでのこの試合後、ベンチで一人悔し涙を流した事は今でも鮮明に記憶しています。

大学は地方の医学部に進んだ関係で、しばらくご無沙汰致しましたが、平成11年に東京に帰り、すぐベガサス・ジュニアに入れていただきました。3年間でリーグとトーナメントで1点づつ入れさせてもらいましたが、先発出場は数えるほど、とくに一昨年の四十雀1部では全く戦力になりませんでした。現在は、東京に住み、埼玉県中部の病院に勤務という厳しい条件ですが、学会などを除いては何とか自分で日曜勤務の予定を組める立場ですので、月4日のうち3日ぐらいいは試合に参加できると思います。諸先輩方からは、将来の幹部を期待されている節もありますが、何と言っても自分としましてはレギュラー獲得が今年も目標です。25年目の目標達成に向けて頑張りたいと思います。

（昭和53年 湘南高卒）

6. 湘南サッカーと共に

ジュニアチーム 遠見 治

私が湘南サッカーと出会ってから、30年余になります。大学時代に始まり現在に至るまで、並々ならぬ関わりを持って、多くのサッカー仲間を得る事ができました。最初のきっかけは、48回卒の青木君からの湘南クラブへの勧誘に始まり、湘南クラブの試合だけではなく、湘南高校のOBと一緒に、正月や夏の合宿の時に紅白戦などに参加させていただき、まるで湘南高校のOBの様に楽しませてもらいました。ちなみに私は、鎌学の出身です。

大学時代には体育会系のサッカー部を中心に活動していましたが、社会人になると一時期サッカーをする機会が薄れ、サッカーを忘れかけていました。そんな折りに、湘南クラブで一緒だったメンバーが中心となり、サッカーに限らず体を動かす機会を作ろうと「湘南ボールクラブ」を結成し、同じような同好会や社会人のチームを相手に試合を組み、楽しんでいました。また、このときサッカーウイドウを作らないよう夫婦でもできる「ソフトボール」や「綱引き大会」に参加することもありました。

子育ての時期には活動は控えめになっていましたが、36歳になると茅ヶ崎の「オールリーグ」に参加できることを湘南クラブ時代からお世話になっていた渡辺さんから知らされ、月に一試合ほどサッカーができるようになりました。「オールリーグ」は少年サッカーを支える父親が中心になってチームを作りリーグ戦を行っています。当時は、初心者の方もいたためか試合の内容は、適度に楽しめるものでした。

40歳になると湘南ベガサスでプレイできることを知り、期待して参加すると、レベルの違いに驚くと共に、自分の体力や技術の無さに失望し、自信を失いそうでした。しかし、サッカーをする事が根柢から好きだった事もあるって、まずはメンタルの面から調整し、日頃運動から遠ざかっていたので、時間を作って運動をするよう心がけなんとかチームの足を引っ張らないように努力しました。その甲斐もあってか、今日まで続いています。

ベガサスジュニアは今年で10年目になりますが、県議長杯準優勝・群市四十雀一部リーグ三位・二部降格・二部準優勝&一部昇格・・・昨年度はやっとの思いで三部降格を凌ぎ二部残留をしました。一番記憶に残っているのは、三年前の二部準優勝の最終戦です。チームの仲間がやり繰りして全員集合、対戦相手も最終戦とあって、開始当初は気迫あふれる試合展開でした。ボランチの関君から右に開いたサイドバックの私にパス、そして左前のオープンスペースに走り込んだ吉田君にクロスパス、それをドリブル突破して鮮やかな先制ゴール。結局、4-0と圧倒的な勝利のもと一部昇格を決めました。今でもよく覚えています。その他にも試合ごとに何らかの良いプレイ、

もちろん悪いものもありますが、そういった記憶が日々の日常と非日常を交差して、楽しく毎日を暮らす糧になっていると思います。このような糧を得る機会を与えてくれる、湘南サッカーに感謝しております。今後とも宜しくお願いします。

(昭和51年 鎌倉学園高卒)

7. 15年間の思い出 (今60歳還暦)

シニアチーム 藤田 勉

眞品さんに誘われて、20年間継続していたIBM SOCCER部を退部し 45歳の時に湘南ペガサスに入部させて頂き、15年経過しました。

この15年間、毎週末、皆様に大変お世話になり感謝しています。

ペガサスのサッカーを通じて素晴らしい人達に会うことが出来、又一生懸命走る事で、いい汗、いい疲労、ストレス発散をすることが出来ました。精神的、肉体的に健康で、仕事に邁進できたのも皆様のお陰と感謝しています。

私は、45歳から55歳迄、四十雀 一部に参加させて頂いただき 56歳(平成11年 1999)から五十雀に参加させて頂いています。この15年間で印象深い事は

1) 平成11年 第3回五十雀リーグでの優勝

2) 平成14年 第6回五十雀リーグでの優勝

などです。

自然現象で老化は、避けられませんがSOCCERをすることによりその進行を遅らせている感じが致します。素晴らしい友と楽しい老後を送るためにも是非、皆様の仲間の一員であり続けたいと願っております。今後とも宜しくお願いします。

(昭和36年 修道高卒)

8. フレッシュマンの今

ジュニアチーム 水上 雅樹

昨年春から藤沢に戻り、今年からペガサス加入資格を得た。40才以上のチームでプレーすることに関しては、正直、なめてかかっていた部分があった。船橋リーグで20才前後の若者とも対戦していたことを思えば、母の疾病、他界、転居、工場閉鎖、転職などのために実質1年のブランクがあることを加味しても、もの足りなさを感じて思っていた。だが、ピッチで見た現実、自分の抱いていたイメージとは全く異なるものであった。白銀の混じる髪をなびかせたプレーヤー達が、いぶし銀のパスを繰り出し、矢のようなシュートを放つ。ここ数年のプレー環境よりも、実際は厳しかったのである。ポイントを突いた動きと正確なパスやシュートの方が、走力であっても無駄な動きやパスミスの多い若者のサッカーよりも、対応するのが難しいことを痛感した。暖かい浜風を受けてプレーしていると、少年時代に戻るようで、懐かしさがこみ上げてくる。先輩達に負けないように、コンディションを整えよう。

高校時代に15才上の先輩達と練習試合をしたことを覚えています。そのときの経験から、異なる年代のプレーヤーとピッチを共にすることは、サッカーのプレーの質を高めるだけでなく、人間的にも幅を広げ、将来の生き方を考えるうえにおいて大変役立つものだと感じています。地元に戻ってきて、その頃からの顔見知りの先輩達と、また一緒にプレーする機会を得られたことは、私にとって幸運だったと思っています。また、今後のペガサスの活動が、高校OBの枠を越えた地域に根付いた活動になることを願っています。異なる経験をされた方と同じチームでプレーすることで新しいものが得られ、地域の活性化にも繋がると思うからです。少年サッカーのコーチを務められている方も多いと聞いています。将来、ペガサスが地域サッカーの拠点のひとつになってくれていることが夢です。私自身も好きなサッカーで、いいプレーを続けることが、地域文化の一端を担っているのだと勝手に解釈して、そのスタート台に立ったことに喜びを感じています。

(昭和56年 湘南高卒)

あ と が き

一昨年（平成13年）、ペガサスを立ち上げ、育ててこられた大内健嗣さんが他界（享年64歳）され、昨年は、ペガサスの堅守を支えてこられた佐伯修三さんが急逝（享年61歳）されました。ふと思いつき指折り数えますと発足後25年を迎えようとしていることに気付き、これは記念誌を編まざるべからずと彼方此方打診したところ大方のご賛同が得られ作業が始まりました。

前回15年誌では、大内さんがご経営の会社の方の勤労奉仕を得て印刷原稿を纏めて下さいましたが、今回はパソコン利用のご寄稿が殆どで、手間と費用を大幅に縮減できました。

桑田孝さん、鈴木中さんから懇ろな祝辞を頂いたのもペガサスが基礎を固めた証しとも云え、ご同慶の至りです。

またクラブが三つのチームから構成されるようになりましたが、緊密な連絡をとりながら編集でき、発行に至ったことにも感謝し、クラブとして健全に発展してきたおかげと考えます。

たくさんの方のご協力にお礼申し上げますが、とくに、山本修さんが緻密に整理してこられた古い記録などにもとづく助言を下されたこと、浅倉 泰さんがパソコンを駆使してカラーページを制作して下さいしたこと、渡嶋さんがご縁のあるところの機器使用をお手配くださったことなどを報告いたします。

また県リーグの勝敗表は郡市連盟のご好意によりプログラムから転載させて頂きました。謝意を捧げます。

次回はいつになるのか、昨年からはまった日本協会主催大会での快挙を記念して発行する日のくることを期待しています。また会員のより多くが寄稿されることも望んでおきたい。（今回資料散逸できちんと整理できなかった古河マスタース大会などの記録も何処かに残しておきたいものです）

会員諸子の益々のご健勝とペガサスの発展をお祈りします。

（シニアチーム 総務担当 篠田 亮 記）

発行者 湘南ペガサスサッカークラブ

代表者 中郡大磯町東町 1-7-14

井上 孝